

特116

619

岩谷定次郎著

基督教之特色

伯尔尼之集

横濱 福音社書店



始





特 116  
619



基督  
教之特色

伯亦之之葉

大三  
1.12.7  
內交



日露戦役に際し、病院  
船博愛丸事務長として  
出征中の撮影に係る。

著者の忘れ  
形見に三男  
あり。記念  
の爲め併せ  
掲ぐ。





出立中の遊園に於て。  
 遊園愛兵事務員とシテ  
 日露輝券に對シ、檢閲



遊園。  
 の發と拍々  
 あり。昨念  
 紙見ニ三俣  
 善香の忘り



序

世に於て最も愛すべく、最も慕ふべきは、敬虔の念深く同情の心に富める人にして、故岩谷定次郎君の如きは即ちその一人にてありたり。君逝いてこゝに四年ならんとす。温乎たる其姿容、靄然たる其言、猶彷彿として耳目の間に在り。其風采氣魄、活如として猶在ますが如し。

回顧すれば十有三年前、予が圖らずも日本組合横濱基督教會の招聘に應じて牧會の任に就くや、君既に會員中にありき。一夕來り胸中を披瀝して曰く、我はパウロの如く「食ふにも飲むにも何事を行ふにも凡て神の榮を顯はすやうに」と行動し、而して「我キリストに效ふ如く爾曹われに效ふべし」と、良心より言明し得るやうに進みたきは朝夕の祈禱なりと。爾來君が修養を見るに此一點に注がれてや、自得する所ありたるが如し。晩年病を獲、病床にあること數年、此間病苦に



加へ貧苦と闘ひ、備さに世の辛酸を嘗め、常人の堪へ難き困苦に遭遇したるも常に天父の恩寵に沐浴し、感謝の念何時も胸中を往來し、平和喜樂心に溢れ、曾て不平不満の念に襲はれたることなし。

君此の如き境界に於ても、一日も同胞の救済を忘れず神國の發展を意とし、同病者ありと聞けば郵書を發して之を慰藉し、無告の可憐者に對しては進んで其友たらんことを期し、或は情實の纏綿せる家庭を救はんとて、其重荷を分擔して葛藤を解きしことなど、今日に於て猶その事跡の歴々徴すべきもの残り居れり。しかのみならず、病少しく愈ることあれば求道者の槩にもと筆を執り、終に成りしもの此の「基督教の特色」なり。

今回、故人竹馬の友、牟田易太郎兄此遺著を出版せらる。本書果して世人の思想を啓發するに足るべきものあるや否や圖られずと雖ども、君が晩年血を吐きつゝ、祈禱と奮闘の中に成りしものにして生涯の紀念碑とも云ふべきものなれば、深き

同情と大なる感興とを以て推薦せんと欲す。

横濱組合教會にて

大正元年十一月十日

平 田 義 道



序

故友岩谷定次郎兄の遺著、今や、牟田易太郎兄の盡力に依りて、之を出版するの運びに至れり。岩谷兄と、牟田兄と、余と、稍年齒を異にし、且つ信仰の道に入るに前後ありしと雖も、共に同郷竹馬の友にして、幼時、余等三人の住家は、隣接して相呼應すべく、朝夕嬉戯の際にも、事を興にせざること少かりき。青年時代に至りては相別れて索居することありしも、猶ほ、屢、故郷に相會して、朝夕の歡を盡すことを得たり。明治二十年の頃、余、福岡より久留米に歸り、受洗して基督教徒となるや、岩谷兄も、又大阪より歸り來り、既に信仰の道に入れるを知りし時は、余は如何に千萬人の味方を得たるの感をなせしよ。其の頃、久留米に於て、基督教徒たるもの、男女纔に十餘名に過ぎず。當時、保守的の我故郷は基督教に對して、少からざる誤解を懷き、往々内外の迫害を加へたりき。爾後、



余が東遊の途に上りしまで、大凡三四年の間、岩谷兄と余とは、互に相助け相勵し、或は共に筑後河畔の月夜に祈り、或は共に高良山上の春色に、神の國の前途を語り、形影相伴うて、嬾々相忘るゝこと能はざるものありき。

幼時、岩谷兄は、學才著しく秀で、郷黨の父兄、竊に其の將來に矚目せしに、翻然として基督教徒と爲る。兄の前途に、少からざる暗影を投せざる能はざりき。されど、是れ決して兄自身を煩はすに足らず。兄が優れたる品性と才力とは、却て逆境に於て、其の光を添へたるものありき。此の際の事なりき。余等が組織せる基督教青年會は、其の親陸會を、久留米市外、逸上と稱する處に在る、風光好き舊藩主の別莊跡に催さんとする。然るに、其の日に至り、風雨遽に烈しく、加ふるに、逸上に到らんには、一里に近き途を歩せざる可からず。多くは躊躇の色あり。されど岩谷兄と余とは、一旦決定せるを動かすは、基督教徒の面目に非ざるを主張し、他も亦之に賛し、遂に、徒歩傘を廢して、逸上に到り、雨戸を閉ぢ

たる薄暗き屋内に於て、風雨の叫びを聞きつゝ、讚美歌を歌ひ、祈禱を共にし、愉快に、半日を過し、ことありき。今より之を思へば、殆ど兒戯に類したりしと雖も、今猶ほ、想ひ出で、其の教訓の忘れ難きものあり。

明治二十三年の頃、國家主義の反動起るや、九州は殊に甚しきものありき。此の時、岩谷兄は忠君愛國の精神と基督教の信仰との關係に就て、頗る苦心したりき。余は、岩谷兄が、此が爲に、殆ど、近頃までの流行語たる所謂煩悶に陥り、其の切實なる忠愛の情と、自己の懐ける信仰との調和に、睡眠をすら忘れたることあるを知れり。今や、皇室及び國家と基督教信仰との關係は、既に解決せられて、過去の問題と爲りたるが如きも、猶ほ往々にして、基督教を以て、日本の精神と兩立せざるもの、如く論ずる學者なきにあらず。岩谷君の解決、素より完きや否やを知らずと雖も、兄が此點に於て、誠心誠意、所謂煩悶に陥りしが如き、忠愛の精神の、今猶ほ掬すべきあるを覺ゆ。



明治二十六年頃、岩谷兄も又東上し來り、數年間商業を見習ひ、後横濱に於て郵船會社に入れり。其の頃、余は神學研究の爲に忙はしく、屢兄と會するの時間少かりしも、機を見て相會し、信仰上の談話を爲すを得たりき。此の時代は、寧ろ兄が精神上の危機にして、余は屢兄の爲に、祈らざる能はざりき。されど、兄をして他日一層深くキリストの恩愛を實驗せしめ、感激の情を以て、前途望多き自己の生涯に告別せしむるの基礎を開かしめしは、亦此の時代にてありしと謂ふも誰か之を不可とせん。唯神の惠深き攝理を感謝せんのみ。

明治三十四年の初夏なりき。余は父の病氣見舞の爲めに久留米に歸れり、岩谷兄も亦期せずして歸省し居たりき。余は兄に會して更に神に感謝したりき。そは、此時、余の兄に對せし杞憂の全然雲散霧消し去るを得たるを以てなり。兄が傳道心の旺盛にして、親戚故舊の爲に、殆ど一日として道を語らざるなきの有様は、余をして頗る感激せしめたりき。兄が竊に直接傳道に身を投ずるの志あるを余

に漏したるも、實に此の時に在りき。神意實に測るべからず。此の時、誰か知らん、兄が肉體は既に病魔の犯す所となり居らんとは。在郷の樂しき間に、兄は實に咯血して不治の病に罹れり。

病勢幸に激甚ならず、横濱に歸りて、猶ほ事務に従事するを得たるも、其の侵潤年を逐うて、加はり來るを如何せん。遂に會社に請うて、海上生活に移り、社船の事務長となれり。間もなく、日露の大戦役起り、兄は病弱の身を顧みず、御用船の事務を處理し、一たび大連に於て、赤痢に犯され、戦役の終るを待て、豆相の海邊に靜養せしも、やがて職を辭して、故郷久留米に歸り病臥するに至れり。兄が久留米に歸るや、遂に起つ能はざるを覺悟し、益深く聖書に親み、キリストの恩惠の愈大なるを識り、殊に其十字架の意義を味ひ、慨然として、自己の信仰の經歷を留めて、他の入信の契となさんと決心したり。當時、兄が余に贈れる書簡の一節に、



(前畧) 本年九月上旬、家計緊縮の目的を以て、表書仲兄の許に移轉同居すること、相成、爾來、友なき山里に孤寂の生活を營み居候。(中畧) 十月二十二日、仲兄の家族と共に、近き山に茸狩に赴き、其の夜小生大略血を始め、五日間に亘り、八回の大略血、前後一升餘を略出し、肺組織の一部迄略出して、一時は頗る危険の状態に陥りしも、大能の加護、猶吾を離れず。二十七日以來略血止み、爾來、平臥静養、去月十一日より漸く床を離れ、専ら安靜を旨とし加養昨今は稍元氣恢復、讀書執筆も少しく出来る様に相成申候。家内出産に關しても、今度の打撃に關しても、小生は神恩の洪大無邊なるを味ひ只管感謝致候。小生の前途は依然として暗黒なり。退社の折、下附せられたる些少の金も追々座食し去り、今後僅に三四箇月を支ふるのみと相成、小生の健康は右の如く、再び活世界の人となりて、パンの爲めに働くことは出来不申。瞑想すれば、一幅悲惨の光影、眼前に浮び來り候得共、過去に於て小生を恵み、今も猶ほ恵

み助け給ふ神の、なご將來捨て給ふことあるべき。小生は萬事を主の手に任せ、樂觀致居候。唯衰殘枯槁の餘生を如何に過すべきや、吾が現下の境遇に於て何を爲すべきや。先づキリスト内住の自覺の一層鮮明痛切となり、彼の保羅と共に、最早我生けるにあらすキリスト我に在りて生けるなりと言ひ得る様に、只管神の恵を祈り居り候。今回の病氣も、畢竟、神が小生の不信不忠と怠慢とを警戒し給ふ愛の鞭と深く感謝致居候。若し聖旨に適は、小生の知己友人に願つべく、平易に基督教を説明したる小冊子を記述致度と存候。御存知の通り、の素養無之ものにして、斯る企は寧ろ不適當かとも存候得共、何か少しでも主の用を勉め度、それにしては、筆に依る外無之、先づ大に祈り求め、感興湧き候は、着手可仕、如何なる書も、人格と心情の發露なれば、先づ以て、其の根本を培ひ可申、昨今は以前よりは多く聖書を読み居り候。(後畧)

是れ、岩谷兄が永眠半年前の書簡にして、實に此書冊の精神を語るものなり。



是れ、實に兄が自緒とも稱すべきと共に、及ばぬながらも、主の用を勉めんと、病間且つ祈り且つ執筆せる、兄が面貌の眼前に彷彿たるを覺えしむ。本書の稿全くなり其浄書を終へて未だ七十日ならざるに、兄は終に明治四十二年五月十二日を以て永眠せり。げに兄が自ら言へる如く、如何なる書も人格と心情の發露にあらざるはなし。此の書を讀むもの、之を語句と所論との末に求めずして、兄の人格と心情とに求むるあらば、亦以て兄の素願を満たすに足らん。殊に余を始め、岩谷兄を知れる者に取りては、此の書は、兄が精神的の形見にして、他の理解し能はざる兄の心情を酌み取るに餘ある者なりと謂ふ可し。

牟田兄と岩谷兄とは、管に主に在りて兄弟たるのみならず、由來縁故ある間柄にして、余は、牟田兄が基督教を信するに至れるも、岩谷兄の感化少からざりしを信するなり。牟田兄が、此の如き故友に對する情誼を重んじ、其の遺志を成すに熱心なる、亦實に欽すべきなり。余や牟田兄の請に任せ、文字に些少の訂正を加

へたる所あり、且つ出版に際して、故友に就きて語らざらんと欲するも能はざるなり。遂に書して以て序文と爲す。

大正元年九月十二日

朝鮮大邱府にて

友人 千 磐 武 雄 識



自序

著者嘗て神學を攻めず、又宗教哲學に關する何等の素養なく、隨てキリスト教に關し兎角の言議を公けにする如きは、所謂烏澁の謗を免れず。況んや、書中反復する所の神子的生活の如き、未だ能く著者自身に於て其實現を證明し得るに至らざるをや。されど天父とキリストとの愛は、我を驅りて敢て此大膽なる行爲に出でしめたり。讀者願くは少時忍んで吾が懺悔告白を許せ。

慈愛無量なる天父は、人の中にて最も弱く、最も愚かに、而も罪に就ては首なる我を、母の胎内より選び置き、見えざる愛の聖手を以て我を育て、守り、導き、十五歳の時、大阪川口提摩太教會に於て洗禮を受けしむ。後日本基督教會に轉じ更に現今の組合教會に屬し、以て今日に至れる二十餘年の間、幾回か礙き、幾回か背き、幸に法律を犯すには至らざりしも、醉酒邪淫、其他あらゆる罪を犯して



憚からず、兄弟姉妹を憂へしめ、未信者を礙かしむるも意とせず、全く神を忘れ  
 て、罪の子と墮落したるに拘らず、神は猶怒りて我を亡し給ふことなく（頃ろ、十  
 餘年前の日誌を繙き、我當時の生活の醜穢陋劣にして、全く肉慾の奴隸となり飲  
 酒姦淫を人生の快事と心得たる如き記事の、隨處に見出さるゝを讀み、吾ながら  
 唾棄せんばかりに感じ、斯る罪惡を遂行する刹那、能くも神の義罰を蒙り即座に  
 血を吐いて死せざりしことよと、我罪の空恐ろしきを思ふと同時に、熟々神の寛  
 容と愛の無限なるを悟り、感謝の涙に溢れぬ、去る三十二年の末より、三十三年  
 の初めにかけて、瀕死の重患に罹りたる際、神は、救済の靈能を以て、我肉體を死  
 の手より助け出し給ひしのみならず、亦我靈をも永遠の亡滅より救出して、茲に  
 翻然新人の生涯を志すに至らしめ給へり。

爾來、凡十年、感激報効の念は敢て渝らざらんことを期しながら、薄志弱行、我  
 思ふ所の善は之を爲さず、却て欲はざる惡は之を行ひ、徒らに地を塞ぎて、果を

結ばざる無益の樹たるのみならず、動もすれば過ちを重ね、罪を犯し、其聖旨を  
 痛め奉る、不孝背恩の子たること多かりしが、神は斯くても、我を斫去りて火中  
 に投じ給ふことなく、三十四年の春、突然少許の咯血を見て肺患あるを覺知し、  
 爾來靜養の傍ら、海上勤務に服し、三十六年の末、再び肋膜炎に罹り、三十七年  
 の夏、赤痢に冒され、其都度重態に陥りしも、幸に恢復し、居ること六年、終に去  
 る四十年の春、新たに急激なる熱性病に罹り、同時に右耳全く聾し、終に全く世  
 の務を廢するに至りしが、愛護の手は猶我を離れず、一たび必死を覺悟せし身の  
 再び回生の喜を得、爾來靜養怠らずと雖も、痼疾漸く膏肓に入り、容易に治癒の  
 望なく、終に昨年十月、數回に亘り大咯血をなし、辛うじて萬死に一生を得たる  
 以來、肉體の衰弱甚しく、咯血以前に比して殆んど別人の如く、今は唯起座に  
 堪ふるのみ。一舉手一投足の運動も直ちに疲勞を感せしめ、發熱咳嗽等の症、狀  
 聊かも減退せず、今や羸瘦を極めたる身は着衣の重さにも堪へざらんとす。斯く



て肉體の上より言へば、徒に他の厄介たる無用の長物となり了れるなり。之を要するに、三十三年以來は、時に極めて短期の比較的健全を自覺したることありと雖も、大部分は病的不健全を免れず。此間、家事人事に關する種々の困難苦慮も尠からざりしが、病軀を鼓して能く是等の疾患困苦と闘ひ、以て今日に至れること、偏へに神の愛護に歸するの外なく、況んや我肉體は、病の打撃毎に衰弱を加へ行くを免れざれども、我心靈は之と反比例をなし、打撃毎に神の甚深無量なる愛を悟り、十字架の死を以て之を顯彰し給ひしキリストの愛も、漸次に我心裡に澆ぎ、其滋味骨を濕し、髓に浸みて、パウロの所謂「我等が外なる人は壞るれども、内なる人は日々新なる」を感じ、我肉體に關する事情は、一として樂觀すべきものなしと雖も、斯く迄に我を愛し給へる天父は健康なり職業なり、此等の必要なるものは必ず與へ給ふべしと信じ、疑はず、懼れず、感謝と希望と悦樂との中に日を送り、而かも、此衰殘枯槁の身にも、相應しき主の用を勉め、

病めるにも、健かなるにも、死ぬるも、生くるも、聊かにも神子的生活の光榮を發揮して、其聖旨に答へ奉らんとの志は益々旺盛熱切となり、未だキリストの愛を體得實現して、四隣を徳化する如き至境に達せずと雖も、世人の所謂逆境に處して奮戦苦闘、而して終に勝ち得たる我現在の喜悅は、眞に天父の無限の恩賜にして、救済の靈能は、慥かに此「ヤクザ」な者を救ひ、以て其靈能を證する一個の器となし給へるを信じ、其あらゆる困難痛苦は、凡て我を警醒し、鞭撻し、鍛練し、以て神に近かしむる愛の攝理に出でたるを悟り、「肉體の父はその心に任せて暫く我等を懲しむ。然れど靈の父は我等に益を得せしめて、其聖潔に與らせんが爲懲しむることをなす。凡ての懲治今は悦しからず、反て悲しと思はる。されど後これに由て鍛練する者には、義の平康なる果を結ばせり」(希伯來十二〇十、十二)の聖語、決して吾を欺かざるを實驗し、一念之に及べば、感涙滂沱として下ることを禁せざりき。



本書は、即ち此感激の餘瀝に過ぎずして、著者自身が感得實驗したる天父の甚深無量なる愛と恵みとを、未だ之を知らざる人々に頒たんとすの衷情より、淺學不文を顧みるの違なく、聖書の教ふる所と自己の實驗を基礎とし、事々に神靈の啓導と補助とを祈り求め、漸くに成れるものなり。讀者願くは通讀熟慮、著者微衷の存する所を認め、斷然志を決してキリストに來り、自ら救済の靈能を實驗し、神と共に活くる多幸多益の神子的生涯を送るに至らんこと、是れ實に著者の眞摯なる祈願なり。著者元來文辭に嫻はず、爲に情熱して筆端奔放し、時に重複に陥り冗長に流れ、或は措辭用語の禮を失ひ、妥當を缺く如きは、切に讀者の寛恕を仰ぐ所なり。

終りに、我境遇に深厚の同情を寄せ、或は訪問に、或は書簡に、或は他の方法により、常に慰藉奨勵を與へられ、又は熱切の祈りを以て我を支持援助せられたる年來の兄弟姉妹に對し、茲に謹んで感謝の誠意を表す。尙本書の編述に關し、特に

祈りを以て助けられたる親しき兄弟等に對して、滿腔の謝意を献ぐるもの也。

病床に於て

明治四十二年三月六日

著者誌



# 基督教の特色目次

序 論 (一頁至一四頁)

本 論 (一五頁至一二八頁)

第一章	祈 禱	一五
第二章	安心立命	二〇
第三章	キリスト教と勤王	二四
第四章	キリスト教の神観	三五
第五章	天父の示現としてのキリスト	四一
第六章	キリスト教の罪惡觀	四八
第七章	救主としてのキリスト	五五

目次



第八章	救済の靈能……………	六八
第九章	キリスト教と其理想の實現……………	八一
第十章	キリスト教と人倫……………	九一
第十一章	信仰の意義……………	一一六
第十二章	撰擇の自由……………	一二一
第十三章	結 論……………	一二八
附 録	求道の栞……………	一三五

# 基督教の特色 附求道の栞

故岩谷定次郎著

## 序 論

(一)

時代と宗教

方今文明の進歩と共に、諸事複雑に赴き、一方には科學の光明宗教の迷信謬想を照破し、大に宗教の權威を殺したる觀あり。他方には生存競争日に甚しく世人皆生活の爲に汲々として、亦他を顧るに遑なきが如し。此等の形勢は、人をして知らず識らず物質的活動主義に陥らしめ、肉慾満足の惡風に墮せしめ、宗教の如きは、實際の生活と關係なき一個の閑問題と考へしむるに至れり。

宗教の感化影響

然れども、是が認見たる事は識者を待たずして明かなり。蓋し宗教は人心の奥底

序 論



に根せる一種の要求にして、人心の亡びざる限り、必ず之を満足せしむるものなかるべからず。此故に、人類の住する所、必ず宗教あり。其信仰の對象たる神佛の觀念に於て、朦朧たるあり、明確なるあり、倫理的なるあり、非倫理的なるあり。隨て其教説禮典等に笑ふべき迷信を含めるあり、或は稍高尚なる思想と、之に相應しき禮典等を有するあり。其内容、形式固より一ならずと雖も、蒙昧野蠻の民より半開文明の民に至る迄、物質以外に心靈の存在を認め、人間以上に或實在を信じ、之を所據とするに至つては殆んど相同じ。其内容實質の善惡、其思想觀念の高下が、其を信する者に及ぼす影響、感化の大なる事は、之を個人の品性事業に徴し、國民進歩の程度に照し、又歴史に、又現在の事實に證し得て明かなり。未開人民の宗教は幼稚にして不健全なり。文明國民の宗教は高尚にして健全なり。然れば、其如何なる宗教を奉ずるかは、以て其人と國との價値を定むるを得ると同時に、其如何なる種類の人と國とに信せらるゝやは、其宗教の優劣を判

するを得べし。

之を要するに、宗教は個人の品性に、生活に、事業に、直接の感化を及ぼし、延て社會の風紀に、國民の元氣に、至大の影響を興へ、其盛衰興亡に甚深の關係を有するものなれば、其取舍選擇は決して忽諸に附すべからざるのみならず、苟も人生生活の意義を悟り、多幸にして又有益なる一生を送らんと冀ふ者は、第一に解決すべき當面緊要の大問題なりとす。

(二)

均しく宗教と云ふと雖も、其幼稚なるもの、劣等なるものに至つては、其信仰の對象として、或は日月星辰、山河草木を拜し、或は下等の動物を崇め、或は史上の偉人英雄を祭り、或は人間の想像より描き出せる雑多の神佛を信する等、人智の發達に伴ひ、漸次衰滅に歸すべきものなり。方今我邦の俗間に行はるゝ所謂信心なるものは、多くは此類を出でず。御大師様と云ひ、穴森稻荷と云ひ、或は不

閑問題に  
あらず

幼稚なる  
宗教



昭代の怪

所謂信心の真相

動、或は煩魔、一々枚擧するに違なしと雖も、多くは幼稚未開なる時代の遺物にして、其信心の動機低く、其内容の貧しきこと言を俟たず。

其所謂御願なるものは、家内安全、息災延命、商賣繁昌、福德圓滿、病氣平癒等。多くは一身一家の物質的利益と幸福とのみを目的とするものにて、幸に其願望實現せらるれば、彼等は其信心の効驗、神佛の御利益なりとして、隨喜渴仰し金品を寄進して感謝の意を表す。有名なる神社佛閣に於て、其鳥居、燈籠、石段手拭、幟等に、麗々しく藝娼妓若くは樓主の名を誌せるものを見る事屢あり。道徳上正業者と見做し難き是種の人々の御願成就は、一面に於て子弟の墮落、家産の蕩盡、家庭の波瀾等、幾多の悲惨なる事實を物語るものにて、其感謝の紀念物は、慈親、孝子、烈婦、貞女の涙の塊りなりと謂ふべし。神は非禮を受けずと云ふに、斯る不正不法なる神佛信心の今猶盛んなるは寧ろ昭代の怪事と謂ふべし。其他、普通の人の信心なるものは、所謂自家の氣休の爲め、其拜するもの、何たるを問はずに禮拜祈願するものにして、其守り札を尊み、加持祈禱に依頼する如き、全く人類の弱點を表し、之に依て、辛うじて安心立命を得んと欲するものなり。是等の觀念中には、高尚なる宗教心の萌芽全く含まれざるにはあらざれども、現今文明社會に行はるゝ宗教なるものに比較する時は、寧ろ宗教と呼ぶの價値なきものなり。何となれば、是等の信心の多くは、其信心に由りて其人の人格と生活とに何等の倫理的感化を及ぼすことなく、隨て社會國家に有益なる影響を及ぼすが如きことあらざればなり。

玉石混淆

世には鱗の頭も信心からとて、何にてもあれ、其人に安心立命を興ふれば可なり、稻荷、不動、蓮門、天理、乃至佛教、耶穌教、何にても可なりと論ずる人尠からず。一見頗る寛大なる通論の如しと雖も、是は未だ能く人間の眞價を認めず、宗教本然の意義を究めず、全く玉石を混淆したる謬見と云はざるを得ず。

(三)



誤りなき  
標準

序論

完全なる宗教は、人の智情意、即ち全人の要求を満足せしむるものならざるべからず、とは嘗て聞ける所なるが、此種の専門的なる研究は、著者の企及する所にあらざるを以て、此には最通俗にして、而も正確誤らざる標準を借り來りて、世の宗教を論せんと欲す。

「偽りの預言者を慎しめよ。彼等は綿羊の姿にて汝等に来れども、内は殘狼なり。是其果によりて知るべし。誰か荆棘より葡萄を取り、蒺藜より無花果を採ることをせん。凡て善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結べり。善樹は惡果を結ばず、惡樹は善果を結ぶこと能はざるなり。凡そ善果を結ばざる樹は、斫られて火に投入らる。是故に其果によりて之を知るべし。」(馬太傳七〇五—二十)

善果を結  
ばざる信  
心

以上は、キリストの山上の垂訓中の一節なり。其結果により其樹の善惡を判断するは千古を通じて誤らざる標準なり。善果を結ぶは善樹なり。惡果を結ぶは惡樹なり。世には嚴めしき神佛の名を掲げ、或は何教會、何派なご、堂々たる門戸を

最良の宗  
教

序論

張りながら、之に出入し參拜する信者の品性、行狀、其生活、其職業等を見れば、其信心の結果、那邊に現れ居るかを發見するに苦しむものあり。其殊勝氣に見ゆるは、唯神佛の前に拜伏する刹那のみ。門前數歩を出れば、直に人の惡口を言ひ、或は卑陋なる言行を敢てする等、邪慳なるものは依然として邪慳に、卑吝なる者は舊の如く卑吝に、其他惡癖、弊習、一として改まれるはなく、其道徳的感化力殆んど皆無なるの觀あり。中には寧ろ一種の頑迷偏狹、或は放縱猥褻等の惡風を助長するものすらあり。彼の加持祈禱に托して金品を騙取し、或は護符供物を與へて醫療の妨害をなすが如き、社會の風俗を紊り、人文の進歩を妨ぐる所謂偶像の類は其結果により容易に其惡樹たることを判知し得べし。

之に反し、其信仰によりて、其人の思想精神一變し、改過遷善、理想を追うて向上の一路に奮進し、嘗て利己の外何をも考へず、自我の満足を以て畢生の志となしたりし人、今や博愛仁俠、犠牲献身の精神を抱くに到り、嘗に自己一身の救



濟、更生を完ふするのみならず、家庭に、社會に、國家に、善良なる感化を及す如きは、即ち善果を結べる者にて、其樹の善良なること推して知るべし。今此標準により、諸宗教に對すれば、善き樹として推奨すべきもの、僅に二三に過ぎざるべく、而して其最も多く善き果を結ぶものを最も善き樹と爲すべきなり。此見地よりすれば、吾人は基督教を以て最良の宗教なりと斷するに憚らざるものなり。

(四)

夢の中の稗子

基督教の結べる果を吟味するに當り、第一に必要なは、基督教會と基督教とを區別し、又キリスト教國、若くはキリスト信者の名によりて行はれたる不正不義と、キリストの教訓、及び其必然の結果とを混同せざるることなり。麥の中に稗子の交れるは、古今同歎なり。キリスト昵近の弟子中にすら、其師を敵手に賣りたるユダの如き悪人ありき。之を史上の事實に徴すれば、キリスト教會の中にすら、

多くの厭ふべき罪惡行はれたりき。キリスト信者と唱へて、其實は綿羊の假面を着たる豺狼尠からざりき。宗教改革以前の腐敗せる教會に於ては、人文の發達を妨げ、社會の進歩を阻むが如き、専横暴虐なる行爲、忌憚なく演せられたりき。背教者の名の下に、多くの義人は迫害せられ、或は慘殺せられたりき。輓近に至ても、基督教國と唱ふる政府は、其臣民たる宣教師の殺されたるを奇貨とし、未開幼稚なる異教國に高壓手段を加へ、或は土地を割き、償金を強取し、又は通商上の利權を獲得し、或は獲得せんが爲め、干戈に訴へて、終に虎狼の目的を達するが如き、明かに人道違反の行爲尠からず。其標榜するキリスト教國なるものも偶々以て異教國民に對する攻守同盟に過ぎざるの觀あり。最近米國加州に於る排日運動の如き、濠洲に於る東洋人排斥の如き、苟も博愛人道を標榜せる國民の行爲としては頗る受取がたきものなり。其國の社會を見れば、文質彬彬として道徳行はれ、宗教の感化勢力亦乏しからざるものありと雖も、事一たび國際外交の事



似而非なるもの

に及べば、毫も其効果勢力の認むべきものなきは、識者の窃かに遺憾とする所に  
 して、嘗て我國に於てキリスト教亡國論を唱へしものありしも、亦異むに足ら  
 ず。現今内外の教會の牧師、傳道者、宣教師、信者等に就き、仔細に觀察し來ら  
 ば、決して純善高潔なる人物のみとは謂ふ可らず。名實相副はざるもの尠からざ  
 るべしと雖も、要するに、以上は基督教の根幹と何等の關係連絡なく、唯之に搦  
 み付たる蔦蔓の蔓れるのみ。均しく金銀寶石の色彩と形體を有すと云ふとも是等  
 は凡て偽物なり、麥中の稗子なり、獅子身中の蟲なり。然れど、中には救済の實  
 驗、猶淺きが爲め未だ善果を結ぶに至らず、動もすれば、却て罪の舊き根より惡  
 果を生じ來る如きあり。此等は進歩改善の過程にあるものなり未成品なり。然れ  
 ば、キリスト教の結果を知らんと欲するものは、公平の心と透徹の眼光を以て、  
 眞に其根幹より生ぜしものなるや、否や、即ちキリスト教々理必然の結果なるや、  
 否や、其眞膺、菽麥を辨じ、以て取捨を誤らざるを要す。

(五)

キリスト教の本質

キリスト教は、一民族、若くは一國民の教化を目的として、政治家、若くは宗教  
 家によりて立案提唱せられたるものにあらず。キリスト教は、國の東西を問はず  
 人種の黄白を論せず、四海同胞の主義に基き、個人心靈の救済より、延て萬國萬民  
 の教化を目的とする神意の發現なり。罪惡の子を化して神の子となし、神の完全  
 きが如く完全からんことを期せしめ、犠牲献身の精神を以て、博愛衆に及し、不  
 正不義の跋扈し、醜陋汚穢、到る處に瀾蔓せる此地上に、天國を現出せしめんと  
 する神靈の活動なり。

新生の實

故に、キリスト教入門の第一着歩は、更生なり。「人若し新に生れずば、神の國  
 を見るに能はざらん。」(約三〇三)「人は水と靈とによりて新に生れずば、神の國に入  
 るに能はざらん。」(約三〇五)人一人たび此靈能を感受して、新生の實驗を爲し、  
 進修息まざるときは、其人格の向上窮る所なく、其思想言行、悉く天意に副ひ、



民衆を益し、所謂天工を助け、化育に賛する聖人神子の境涯に達すべし。キリスト以後の多くの聖徒、又は敬虔なる幾千萬の信者は、其分量程度に於て多少深淺の差こそあれ、其實質に於ては皆同じ經驗をなし、着々として事實の上に之を證明せり。

キリスト  
史家文明

試みに、歐米の歴史より是等のキリスト教的人物と其事業を抜き去らば、其文明史は終に編まれざるべし。其の歴史は其光彩の大半を失ふべし。國家の迫害民衆の反抗を顧みず、挺身水火を避けずして福音の宣傳に従事し、多くは爲に非業の惨死を遂げたる古き聖徒は勿論、キリストの名の爲に、慈眼愛腸、献身的活動を以て、人道の爲に戦へる幾多の志士仁人、奴隸解放と云ひ、監獄改良と云ひ、貧民救助と云ふが如き、社會を改良し、民衆を救済する爲に、其身を犠牲に奉げたる有名なるキリスト信者を數へ來らば、日も亦足らざるべし。是等の人物と事蹟とが、如何に世界の文明を進め、人類の幸福を増せしかば、公平なる史家の看取するに

日本に於  
るキリス  
ト教

難からざる所なり。現今に於ても、ブリス大將の救世軍を始めとし、キリストの名によりて博愛慈善の事業が、如何に盛んに行はれつゝあるか。又赤十字同盟と云ひ、阿片禁止會議と云ひ、キリスト教の精神、漸次國際政治の上にも實現し來らんとす。此趨勢は益進んで、天國を實現する迄は必ず熄まざるべし。是實に天意の存する所にして、亦人類の理想なればなり。我邦に於て、其信者の數猶十萬を出でず、其勢ひ振はざるが如しと雖も、キリスト教徒によりて經營せらるゝ慈善、教育、其他社會事業の總量を見れば、幾百千萬の信者を有する佛教其他に比して、決して劣れりとは云ふ可らず。否寧ろ一日の長ありと謂ふも過當にはあらず。而して其信者の少數なる割合には、高潔優良なる人物の能く社會に重きを爲せるもの尠からず。數年前、國會議員中、賄賂の爲に節を賣らざる硬骨の士なりとて、新聞紙上に其氏名を掲げたるを見しに、其大半は、實にキリスト信者として世に知られたる人々なりき。是等知名の人物や



事業の外、其家庭に於て、親戚朋友の間に於て、キリストの名によりて如何に多くの美事善行の行はれ、冥々の間、意外なる感化の波及しつゝあるかも、亦看過すべからず。之を要するに、キリスト教は最も多く善き果を結び、又現に結びつあり。是其根を眞善美の極致なる神に置き、之に連りて、善き果を結ぶことを主眼とすればなり。是を以て之を最良の宗教なりと斷するも、必ずしも失當にあらざるべし。

# 本論

## 第一章 祈禱

我邦在來の祈禱

祈禱は、人間が神明に對する思想の發表なり、願望の陳述なり。然れば、其祈禱の内容を吟味すれば、其人の信仰の高下、其宗教の本質如何を伺ふことを得べし。世上行はるゝ所の祈禱なるものは、前述の如く、専ら、病氣平癒、開運息災、商賣繁昌、其他、水難、火難、一切の悪事災難を免れて、安全幸福に世を渡らんことを祈願するものにて、多くは利己主義なり。物質的なり。肉體的なり。或は、他人の爲に祈ることあるも、家人親戚の範圍を出でず。神社佛閣、其他に於て、信者の爲に行はるゝ御祈禱なるものゝ内容、亦多く異なる所なし。其國連の發展を祈り、或は外戦の日に戦勝を祈る如き、稍高き動機より出ること時として之れな



きにあらざれども、通例、多數人の信心なるものは、利己主義にして、其動機決して高しと云ふべからず。其内容の貧しきこと固より其處なり。是畢竟信仰の對象たる、神佛の觀念の朦朧として、其倫理的性格の明確ならざるに由るものなり。斯る祈禱の所謂効驗なるものは、物質的、肉體的にして、多少の慰安を感せしむる外、其人の品性言行等に及ぼす感化は、殆んど皆無なりと謂ふも、誣言にはあらず。

キリスト教の祈禱

キリスト教にありても祈禱は信仰生活の最要部を占むるものとして重んぜらる。然れど、其祈禱の動機、内容に至ては、如上のものは全く撰を異にし、決して同日に論ずべからず。キリスト嘗て祈禱の範を與へて曰く、

「天に在す吾等の父よ。願くは聖名を尊崇めさせ給へ。爾國を臨らせ給へ。爾旨の天に成ごとく、地にも成せ給へ。我等の日用の糧を今日も與へ給へ。我等に負債ある者を我等が赦す如く、我等の負債をも赦し給へ。我等を試惑に遇せ

ず、惡より拯ひ出し給へ。國と、權と、榮は、窮りなく爾の有なればなり。ア

ーメン。〔馬太六〇九—十三〕

則ち、劈頭第一吾等の祈るべきことは、宇宙萬有の主宰にして我等の父なる神の、到る處に尊崇められんこと、其天國の地上に實現し、其神意の洽ねく世界に徹底遵奉せられんことなり。是れ恰も忠良なる臣子の君父の爲に祈るが如く、其動機の高潔にして、其精神の博大なるを見るべし。次に、吾等の所謂要求なるものは唯其日の糧の與へられんことなり。富貴利達を希ふ如き精神は毫も含まれず、其清廉なること知るべし。次に、人の吾に對して犯す罪は、之を赦すべければ、我等が神に對して日常犯す所の罪をも赦させ給へとの祈りなり。人の罪を赦すは、實際困難なることなり。復讐を是認する道德の感化を受けたるものには殊に然り。人は能く受けたる恩義を忘るれども、蒙りたる害惡は容易に忘るゝものにあらず。人を責むるに嚴にして、己れを律するに寛なり。然れど、我等自身、常に



神の赦免を乞ふべき、多くの罪を犯しつゝあることを自覺することにより、始めて人の罪を心より赦すことを得べし。是實に神の喜び給ふ美德なり。我等は謙遜なる心を以て、熱心に「我等に負債あるものを我赦す如く、我等の負債をも免し給へ」と祈るべきなり。次には、我等を試惑に遇せず、惡より拯ひ出し給へと祈るなり。人生苦多し、動もすれば、人をして失望落膽の悲境に沈ましむ。又其良心を壞ひ、罪の子に墮落せしむる如き誘惑は、常に其内外にあり。然らば茲に謹て神の加護と救助とを願ふは、極めて至當なり。自己の不完全を悟り、人知れぬ罪惡の自覺を有する人は、如何で、之が爲に神に祈るの至情起らざらんや。人類の進歩向上の動機、實に此に在り。我等の斯く祈るは何故ぞ、「國と、權と、榮は窮りなく爾の有なればなり」。即ち、神は宇宙萬有の主宰にして、又人類を愛し給ふこと限りなき天の父なり。權威と光榮は、限りなく之に歸すべく、我等が忠良なる臣民の心、寧ろ進んで孝順なる子の心を以て祈る此等の祈願は、必ず聽

かるべければなり。主の祈は、此の如くして始められ、此の如く結ばれたり。其精神の崇高純潔にして、其内容の正大豊富なる、眞に人類の献ぐる理想的祈禱と謂ふべし。

祈禱の動機

然らば、キリスト信者の祈禱は、人により、時と場合により、千種萬様なりと雖も、其精神と動機に至ては、上記キリストの祈を服膺するものなり。キリスト信者、亦物質的、肉體的の祈願をなさざるにあらず。然れど、其動機は利己にあらず、「飲むにも、食ふにも、何事を爲にも、神の光榮を顯す」の精神に出るなり。病氣の平癒を祈るは、健やかなるキリストの兵士として、信仰の善き戦を戦ひ得ん爲なり。息災延命を希ふは、永く生て神の爲め、人の爲め働き得ん爲なり。事業の成功、商賣の繁昌を求むる、皆由て以て神の聖名を顯し、神國の擴張に貢献せんが爲なり。其日夕、自己の爲め、家人の爲め、親戚朋友の爲め、廣く同胞の爲め、社界國家の爲め、世界人類の爲に祈るは、全くキリストの心を心とす



るものにて、一に敬神愛人の至誠より溢れ出るものなり。些かの私心、我慾を存せざる、斯る祈禱の驚くべき應驗と、其個人と社界とに及ばず効果とは、古今内外、幾多の實例に徴して明白なり。此祈禱の精神と効力とは、蓋しキリスト教をして、諸宗教の中に、一頭地を抜かしむる所以なりとす。

第二章 安心立命

キリスト教の安心立命

世の宗教を談ずるもの動もすれば即ち言ふ、願くは安心立命を得んと。彼等が求道の動機は、實に自家の安立を得んと欲するにあり。是人心通有の要求にして、必しも排斥すべからざるのみならず。有爲轉變の世に處して、人世の無常を感じ、慘雨悲風繁き世に住みて、流離困倦の苦を味へる人の、痛切なる叫びとして深く同情すべきものなり。然れば、此要求に應じて、安心立命を興へ得ざる宗教は、決して眞の宗教と云ふべからず。然れども、單に自家の安心立命を得ば、信

仰の目的達すとなし、之を興へ得ば、宗教の本領盡ると思ふは僻事なり。斯くては、主我的となり、消極的となるを免れず。他の宗教は知らず、キリスト教は決して安心立命を以て目的とするものにあらず。人は之を得る方便として、神を信するにあらず。

「是故に我なんぢらに告ん。生命の爲に何を食ひ、何を飲、また身體の爲に何を衣んと憂慮こと勿れ。生命は糧より優り、身體は衣よりも優れるものならずや。汝等天空の鳥を見よ。稼ことなく、穡ことを爲す、倉に蓄ふることなし。然るに、爾曹の天の父は之を養ひ給へり。汝等之よりも大に勝る、者ならずや。汝等のうち、誰か能おもひ煩ひて、其生命を寸陰も延べ得んや。又何故に衣のことを思わづらふや。野の百合花は如何にして長つかを思へ。勞す、紡がざるなり。我汝等に告ん、ソロモンの榮華の極の時だにも、其装此花の一に及ざりき。神は今日野に在て、明日爐に投入らる、草をも、如此よそはせ給へば、況



して爾曹をや。嗚呼信仰うすき者よ。然ば何を食ひ、何を飲、何を衣んとて思わづらふ勿れ。是皆異邦人の求むるものなり。汝等の天の父は、凡て此等のもの、必需ことを知たまへり。爾曹先神の國と、其義とを求めよ。然ば此等のものは皆汝等に加へらるべし。是故に明日の事を憂慮なかれ。明日は明日の事を思わづらへ。一日の苦勞は一日にて足れり。」(馬太六〇二五—三四)

眞の安心立命

斯る天父に信頼する者の安心立命、孰れか是に過たるものあらんや。然れど、キリストは言ひ給へり、「汝等先神の國と、其義とを求めよ。さらば此等のものは皆汝等に加へらるべし」と。吾人の目的として求むべきは、神の國と神の義なり。吾等之を得て、神と共に生るの境涯に到らば、安心立命は期せずして得らるゝなり。孟子、梁の惠王の間に對へて曰く、「王何ぞ必しも利を云ん。亦仁義あるのみ」と。キリスト教は、天父の心を奉體し、其聖旨を遵守し、神子の完全なる人格を理想として、自我の發展進歩を勉め、推して家庭より社會に及し、以て神國の擴張

何ぞ心して安心立命を云はざる

と實現とに寄與すべきことを、凡ての人類に向つて要求するものなり。是實に、切々たる天意の存する所にして、人類理想の極致も亦此に出でず。キリスト曰く、「我汝等を愛する如く、汝等も互に愛すべし。是吾誠なり。人その友の爲に、己の命を捐るは、此より大なる愛はなし。」(約翰一五〇二—二三)「我誠を有ちて、之を守る者は、我を愛するなり。我を愛する者は、我父に愛せらる。我も亦之を愛して、彼に自己を現すべし。」(約翰一四〇二—二)人、神に愛せらる、是實に安心立命の極致、人間幸福の頂點にあらずや。而も、之は神の誠を守り、愛神愛人の大道を行ふによりて賜はる報酬なり。此故に、キリスト教を信するは安心立命を得んが爲にあらず、人の人たる本分を全ふせんが爲なり。子の親に事ふるは、求むる所あり、期する所ありて然るにあらず、人間の至情にして、亦其大道たればなり。神の吾等の父たるを信じ、吾等の其子たるを自覺し、孝子の心を以て神を敬愛す、自己中心にあらずして、神を中心とするなり。我意を貫徹し、私慾を成



就するにあらずして、神意を敬承し、奉體し、絶對的從順と信頼を以て、之が實現に努むるにあり。亦何ぞ必しも安心立命を言はん。單に人類内心の要求を起點とせず、神の、人類に對して有し給ふ、意思と經綸とを根本となし、人生の一切萬事を之に適應せしむるを期す。是實にキリスト教の卓越せる特色なり。

### 第三章 キリスト教と勤王

#### 勤王家の精神事業

徳川幕府の末路に當り、勤王家なるもの輩出し、終に幕府を倒し、王政復古の機運を作りしことは、我邦近世史上に赫々の光彩を放てるものなり。普天の下、王土にあらざるなく、率土の濱、王臣にあらざるはなし。一天萬乘の皇帝は、當然我邦の最上主権者として、君臨ましますべき筈なるに、幕府の専横なる、六十餘州を吾物顔に支配し、自己は千代田の城儼しく構へたる裡に、宏壯華美を極め、奢侈贅澤を盡し、參勤交代の大小名に臣下の禮を取らしめ、威儀堂々、敢て王者の

態あるを憚らざるに拘らず、肝腎の朝廷は、京都の一隅に閑居の御姿にて、供御の料よりして豊かならず、王室の式微、稜威の衰頹、茲に至て極まれり。同時に、諸外國の來りて、開國通商を迫るあり、人心恟々、國家安危の岐るゝ所として、朝廷に於ても大に震襟を惱ませらるゝの際、幕府の處置、動もすれば宜しきを誤り、奏請を経ずして、擅まに條約を結ぶなど、専横の振舞のみなるに、此形勢を見たる忠君愛國の志士の血は湧けり。彼等は慨然として尊王攘夷を唱へ、或は勤王倒幕を呼び、以て皇室の稜威を恢復し、國家の危急を救はんと企てたり。彼等の胸中、唯此一片耿々の誠あるのみ。成敗利鈍敢て問ふ所に非ず、亦何ぞ一身一家の安危を顧みるに遑あらんや。「かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂」然り、彼等は初めより一身を邦家に献する覺悟にて、敢て危険を冒し、大業を企て、粉骨碎身、以て其成就を期したりしなり。時利あらず、勢可ならず、勤王家の先輩は、幕府の爲め、或は幽囚の厄に遇ひ、或は刑場の露と消



え、或は反對黨の毒刃に斃れ、志成らずして、身先死するの恨を殘して去りしと雖も、至誠豈神明に通せざらんや。其凛烈の意氣、正大の精神は、更に後繼者を激勵奮起せしめ、時運際會、遂に王政維前の宏業を成就せしむるに至れり。其忠勇義烈にして、一點の私心私情を交へざる献身的心事と行動とは、所謂武士道の精華にして、嘆美推獎するに餘りあり。是が子孫たる現代の同胞、顧みて能く耻るなきを得るや。國運進轉し、時勢推移し、亦往年勤王家の精神態度を學ぶ要なしとする乎。曰く否。

人類の墮落

キリスト、嘗て曠野にて惡魔の試惑を受け給ふや、惡魔彼を最高き山に携行き世界の諸國と榮華とを見せて、汝若俯伏して我を拜せば、悉く此等を汝に與ふべしと云へり。キリスト言下に叱して曰く、サタン（惡魔）よ、我後に退け。主たる汝の神を拜し、唯之にのみ事ふべし。（馬太四〇八—十参照）

宇宙萬有は、神の創造統治し給ふ所なり。神は人類の崇敬禮拜を受くべき唯一の

實在者なり。然るに、人類は之に由て生き、又動き、又在ることを得るものなるに拘らず、神を忘れ、之を捨て、反て神ならぬ神を崇め尊び、或は自己の情慾に事へ、或は種々の罪惡を犯して其奴隷となり、惡魔をして、到る處に眺梁跋扈を逞せしむ。それ神の怒りは、不義をもて眞理を抑る人々の凡ての不虔不義に向ひて、天より顯る。蓋人の知るべき處の神の事情は、人に顯明にして、既に神性を人に顯し給へば也。それ、人の見ことを得ざる神の永能と其神性とは、造られたる物により、創世より以來、さとり得て明かに見べし。此故に、人々推諉べきやうなし。既に神を知りて尙之を神と崇めず、又謝することをせず、反て其思念を亂し、其愚かなる心蒙昧くなれり。自ら智と稱へて愚魯なる者となり、朽壞ざる神の榮光を變て、朽壞べき人、および禽獸、昆蟲の像に似す。是故に、神は彼等を其心の慾を縱肆にするに任せて、互に其身を辱しむる汚穢に付せり。彼等は神の眞を易て偽りとなし、造物主よりも受造物を崇奉りて之に事ふ。神



は永遠頌美べきものなり。アーメン。」(羅馬書一〇一八―二五) 人間が眞の神を忘れて、墮落せる状態、書き得て餘蘊なし。神の義しき怒りは燃え、其切々の愛は溢れてキリストの降誕とはなれり。

キリストの使命

キリストは、人類をして、其失へる尊き神の子たる位地を回復せしめ、偶像邪神、或は不義罪惡に事ふる代りに、眞の父なる神に事へしめん爲、又惡魔の勢を挫き、天國を地上に建設せん爲め、神意の宣傳と實現とを、畢生の志願事業となし給へり。眞の拜する者、靈と眞を以て父を拜する時來らん。今その時になれり。それ父は、此の如く拜するものを要め給ふ。神は靈なれば、拜する者も、亦靈と眞を以て之を拜すべきなり。(約翰四〇二三、二四) エダヤ人は、古來神の選民として神に事へ、之を拜すと稱へらる。而も動もすれば、形式に流れ、儀文に泥み、虚飾偽善に陥り、眞に敬神の心なし。吾汝等を知る。汝等は其心に、神を愛するの愛あらざるなり。(約翰五〇四二) とキリストの叱責を蒙りたり。

キリストの犠牲

キリストは、斯る時代に生れ、斯る人民の間に處し、慨然として「天國は近けり。悔改めよ。」との言を以て、神に歸順すべきを絶叫し、一面に於ては、慈眼愛腸、病める者、貧しき者、苦しめる者、虐げらるる者の伴侶となり、之を醫し、之を慰め、管に其肉體のみならず、其心靈を救ふ爲に、東奔西走し、「狐は穴あり、空の鳥は巢あり、然れど、人の子は枕する所なき」迄に、眠食を忘れて勞し、終に奸惡なる有司人民の毒手にかゝり、十字架上に惨死を遂げ給へり。是れ歴史の表面よりすれば、神聖と罪惡と、正義と不義との衝突の結果、哀れ前者の失敗に終りし觀あるも、實は人類救済の爲め、天國建設の爲め、避く可らざる犠牲なりしなり。

キリストの後継者

キリストは、斯て能く其使命に殉じて、之を完うし給へり。其弟子等の多くは、漁夫、税吏等、無學なるもの、賤しきものなりしに拘らず、キリストの精神と事業とを紹ぎ、侃々諤々として正義を述べ、正々堂々として福音を傳へ、其多數は



政府の迫害、人民の反抗の爲め、あらゆる辛酸苦楚を嘗め、或は石にて打れ、或は火にて焚れ、或は白刃の下に、或は十字架の上に、悲惨の最後を遂げたるも尠からず。而も、吾等殉教者の血は、更に幾多の後繼者を起し、迫害愈盛んにして、信者の數益加はり、反抗益激しくして、教勢益振ひ、遂に全歐を席卷して、今日の隆盛を見るに至れり。

パウロの實驗

初代使徒中の最偉大なるパウロは言へり、「我は福音を耻とせず。此福音はユダヤ人を始め、ギリシヤ人、すべて信する者を救はんこの、神の大能たればなり。(羅馬一、〇十六) 「キリストの愛、我を勵ませり。」(哥後五〇四) 又「我勞苦しこと彼等より多く、鞭れしこと彼等より夥しく、獄に入らるゝこと多く、死に遭はんと屢なり。又吾は五たびユダヤ人に、四十に一を減じたる鞭を受け、三たび條にて撲れ、一次石にて撃れ、三たび破船にあひ、一晝夜海にあり。又屢旅路を經、かつ河の難、盜賊の難、同族の難、異邦人の難、城裏の難、野の中の難、海

心靈的革命運動

中の難、偽りの兄弟の中の難に遇へり。又彼等に愈りて勞苦つかれ、屢々寢ず、飢渴、屢食を絶ち、凍裸なりし也。此に云ざる外の事ありて日々我に迫る。即ち諸の教會の憂慮なり。誰か弱りて我弱らざらんや。誰か癡て我心熱せざらんや。もし我かならず誇るべくば、我弱ことを誇るべし。永遠頌べき神、主イエスキリストの父、吾謹らざるを告知ふ。ダマスコに於て、アレダ王に屬る邑宰われを執へんとしてダマスコ人の邑を守れり。吾篋を以て牖より石垣にそひ、絶下されて彼の手を脱れたり。」(十二〇三三—三三三) 是獨りパウロの實驗なるのみならず、キリストの名を呼ぶ、多くの志士仁人は、多少此種の辛酸を経験せざるはなし。キリスト教が如此困難と迫害との下に、堂々として王者の師の如く、行く處風靡せざるなき趣きあるは、豈獨り人爲の能くする所ならんや。宇宙萬有の根柢たる神靈の感應活動に由ずんば、焉んぞ能く、如此を得んや。キリスト及び使徒其他の志士仁人の精神其の事業經歷は、我邦勤王家の其等と能く相似たり。



唯彼は宇宙の神を中心とせる、心靈的革命運動にして、此は一國の君主を根本とせる政治的運動たるの差あるのみ。

我邦風教の現狀

今や、我邦に於て、皇室の稜威、八紘に輝き、憲政の基礎、漸く固く、政治上、此等の運動を再びすべき要なきに至りたりと雖も、風教道德の上に於ては、果して大に憂ふべきものなき乎。語に曰く、「上下交も利を征て國危し」と。我邦の現狀、稍之に似たるなき乎。廟堂に立つ大官にして、屢投機を試みるもの噂傳へらるゝあり。神聖なる立法府の議員にして、黃白の爲に節を賣るものあり。代議士の選舉には、人格よりも寧ろ金力の必要あり。候補者は、政見の發表よりも選舉人の買収に勉め、選舉人は、主義人物の如何を問ふよりは、買収金額の多少によりて向背を決する如きあり。一事に成功し、一利を獲得するも、正直勤勉の常道に依らずして、所謂運動なるものに俟つこと多し。運動とは、當局者又は相手方と、待合料理屋等にて饗應し、或は金品を贈遺して、其心を動かすなり。此運

剛健なる宗教

動の効驗の著しきことは、實に驚くべきものありと傳へらる。然れば、黄金の魔力を使用する者は、之を使用せざるもの、到底望みがたき、利益成功を得て揚々得意の色あり。斯て、官吏も、人民も、實業家も、教育家も、學生も、滔々として黄金崇拜の悪風に浸染せんとす。是眞に邦家の盛衰興亡にも關する危機にあらざらんや。勤王家の血を承け、武士道の精神を傳へたる吾人は、敢て利己的動機によらず、慨然として神意の奉戴、天國の實現を目的とせる、心靈的革命運動に参加すべき秋にあらずや。而も、吾等自ら顧みて、自己心事の陋劣醜汚、到底其神聖なる運動に参加するの資格なきを悟らば、先づ自ら聖靈の洗禮を領し自ら救はれて、他を救ふの順序を蹈み、父なる神に對する忠孝の大義を完ふすると同時に、國家同胞に對する吾人の本分を盡すべきにあらずや。由來、キリスト教に、一面優しき情感の流露にして、能く病る者、苦しめる者、悲しめる者に、無限の慰藉と希望を與へ、是等失意不遇のものをして、其暖かく



優しき愛に、感泣隨喜せしむる如き、所謂女性的の趣きあり。其教會は、往々病院にして、其信者は患者たる如き觀なきにあらず。然ども、一面に於ては、キリストの兵士として、世の不義罪惡と戦ひ、神意の存する處、水火を避けずして奮進する剛健正大なる男子的精神の發動なり。教會は、人類救済、罪惡撲滅、天國實現を旗幟とせる、義軍の牙營なり。キリストは主將にして、牧師信者は將校兵士なり。英氣凜烈、雄風堂々の概なくんばあらず。宗教を以て、單に不健全なるもの、要求を充すものとのみ思へる人々は、來りて能く其真相を研究せよ。恐らくは思半ばに過ん。又吾人キリスト信者と稱へて、此女性的方面にのみ安心執着し、何時迄も、他の注意看護に依頼する如きあらば、須らく向上の一路に猛進して、強健なる神の兵士として、此男子的方面の實驗に参加することを期せざるべからず。又教會は餘りに時代人心に迎合して、此女性的方面を高調する代りに、堂々として此男子的宗教の特色を鼓吹し、發揮すること現下の急務なるべし。

第四章 キリスト教の神觀

人を愛する神

「それ神は、その生たまへる獨子を賜ふほどに、世の人を愛し給へり。此は、凡て彼を信するものに、亡ぶることなくして、永生を受しめんが爲なり。」

(約翰傳三〇十六)

「愛する者よ、我等互に相愛すべし。愛は神より出ればなり。およそ愛ある者は、神に由て生れ、且神を識るなり。愛なき者は、神を識ず。神は即ち愛なればなり。神は其生給へる獨子を世に遣し、我等をして、彼に由て生を得しむ。是に於て、神の愛我等に顯れたり。われら神を愛するにあらず、神われらを愛し、我等の罪の爲に、其子を遣して、挽回の祭物とせり。是即ち愛なり。愛する者よ、此の如く神我等を愛し給へば、我等も亦互に相愛すべし。未だ神を見し者なし。我等若互に相愛せば、神我等の裏に居て、彼を愛するの愛を我等の



裏に完全す。彼既に其靈を以て我等に賜ふ。是によりて、我等の彼に居り、彼の我等に居ることを知る。父曩に其子を遣して、世の救主となせり。我等既に之を見たり。今其證を作なり。(約翰第一書四〇七―十四)

以上の聖句中に、キリスト教の全體を包有せり。蓋神より出でたる人は到底神に歸り、之と共に活るにあらざれば満足する者にあらず。是故に、幼稚なる蠻民の信仰より、進歩せる宗教に至る迄、自己以上の或物を崇拜し、或は現實と超越せる真理の光明に憧がれ、其觀念形式に於て多様なりと雖も、要するに、人類が神に對する憧憬渴仰の念を表せざるはなし。此人間衷心の要求に照し、其があらゆる宗教に現れ居る事實に鑑みる時は、神の有無の如きは既に問題にあらず。世に無神論者、唯物論者なきにあらざれども、人類智識の究極は、物質の裏面に、宇宙の根柢に、一の靈的實在を認めざるはなし。唯彼等は、神の性格、實質に關し或は不可思議論となり、或は凡神論となり、或は純理派となり、或は多神教とな

神に關する諸種の觀念

り、或は神は高く天に座して人界を俯瞰し、其意思動作は全く宇宙に交渉なく、冷然獨り自ら善とする超越神の觀念となり、或は意思なく、感情なく、唯冷かなる一大勢力なりと考へ、或は人間の理性より推究し、斯くあるべし、斯あれかしと推定し希望せる道理、或は法則の如きものとなし、終に人格的神の信仰に達せざる者多し。

神の啓示

夫れ神の性格實質等は、到底人間智能の能く推究し得ざる所にして、是は全く神自身の啓示に待たざる可らず。神は自然界に於て、其智能の絶大無邊なることを示し、又人類の性情に於て、其倫理性の一般を啓示し、其他各國各時代に於て、預言者、聖人、賢者を介して、其正義仁愛等に關し教へ給ひしが、人類が神を見神を知らんと欲する要求は、益痛切に、其墮落不完全を救済せんと欲する神の愛は、愈熱烈となり、茲にイエスキリストの降誕を見るに至れり。

斯て、宇宙の大主宰にして、權威と光榮に於て限りなき全能全智の神は、今やイ

神の顯現は史的事實なり



エスキリストをして、眞善美の完全なる倫理的實在者、人類を愛し其救済の爲に苦心慘憺、終に其獨子を吝み給はざりし天の父として、吾等に自己を啓示し給へり。是詩的神話にあらず、或は人間の夢想に非ずして、歴史上の大事實なり。又幾億萬の信者の實驗なり、生命なり。天地は最早荒涼寂寞たる世界にあらず、人類を愛する、肉身の父よりも深く且つ切なる天父の住み給ふ殿堂なり。父子相親み、同胞相愛する家庭なり。光明遍く照らし、慈恩雨と澆ぐ樂園なり。日月星辰、山河草木も、皆神の榮光を顯し、天空の鳥、野の獸も、天父の慈愛を讚美し無情なる自然界の萬物、悉く吾等に益をなし、事々物々神の愛を顯さるはなし。

最上無比の福音

吾等此天父を信じて、始めて衷心の満足を得、天倫人倫の基立ち、變幻、極りなき慘雨悲風繁き人世に於て、確固不拔の安心あり。亦、顔淵の天折、盜妬の壽など、正義の審判、動もすれば誤り多き觀ある社會に處し、唯此神を信ずるにより

人の本分

て、眞理と正義は最終の勝利者なるを確信し、忍耐と希望を以て向上の一路に進し、あらゆる困難辛苦と戦ひ、以て吾が本分を完うし、神と共に永遠く生ることを得べきなり。是れ豈人類に取りて、最上無比の福音にあらずや。

而して、之を信ずると否とは、直に其人の世界觀、人生觀に、黑白明暗の影響を及ぼし、隨て其人の性格に、思想に、行爲に、感化を與へ、即ち嚴正完全なる意味に於て、眞の人たらしむるや否やを決するなり。「人多き人の中にも人ぞなき、人となれ人、人となせ人」と、此神を信じて、眞正完全なる人の意義始て明かなり。人をして眞の人、即ち神の子たらしむるは、是神の聖旨なり。苟も人となれし吾人、先づ自ら眞の人となり、而て又人を人たらしめて、天意に答へ、以て人たるの本分を完ふせざるべけんや。

神の親心

「愛なき者は神を知らず、神は即ち愛なればなり。」然れば、輕々しく無神論を唱ふる勿れ、妄りに無宗教を誇る勿れ。是は其精神的、倫理的の缺點を自白するも



のなればなり。「親思ふ心にまさる親心、今日の音れ、如何にきくらん。」斯く咏じたる志士の心事を解し得るものは、「是の如く、この小子の一人の亡ぶるは、天に在す汝等が父の聖旨にあらす」(馬太十八〇十四)との神慮に感泣すべし。「子を有ちて知る親の恩」と。此親心を實驗し得る人は、能く「亡ぶるとなくして、永生を受しめん爲、其獨子を遣し給へる」天父の至大至深なる親心を味ふを得べし。「斯の如く、一人の罪ある人悔改めなば、神の使の前に喜びあるべし」(路加十五〇十)と。神は忍んで人類の悔改歸順を待ち給ふ、否、其靈の活動を以て、之を促し給ふなり。讀む人速かに天父の無限の愛を信じ、之を實驗するに至らんこと、著者満腔の祈願なるのみならず、亦天父の切望し給ふ所なるを斷言するに憚からざるなり。

第五章 天父の示現としてのキリスト

「それ、道肉體となりて、我等の間に寄れり。我等その榮を見るに、實に父の生たまへる獨子の榮にして、恩寵と眞理にて充り。」(約翰一〇十四)

「未だ神を見し人あらず。唯うみ給へる獨子、即ち父の懷に在者のみ之を彰せり。」(同上十八)

「彼は、暗の權威より、我等を救出して、其愛子の國に遷し給へり。我等其子によりて、贖すなはち罪の赦を得なり。彼は、人の見ことを得ざる神の狀にして、萬の造られし物の先に生れし者なり。そは、彼に由て萬物は造られたり。天に在もの、地上に在もの、人の見ことを得もの、見ことを得ざるもの、或は位ある者、或は主たる者、或は政を執もの、或は權威あるもの、萬物かれに由て造られたり。且その造れたるは、彼が爲なり。彼は萬物より先にあり。」



萬物、彼に由て存ことを得なり。教會は彼の身體にして、彼は其首なり。彼は元始にして、凡ての事につき長とならん爲に、死の中より首に生れしものなり。そは父、すべての徳を以て彼に満しめ、其十字架の血によりて平和をなし、萬物、すなはち地上にあるもの、天に在者をして、彼に由て己と和がしむる事は、是の聖旨に適ふことなればなり。」(哥羅西一〇三—二〇)

「それ、神の充足る徳は、悉く形體をなして、キリストに住り。彼は、諸ての政と權威の首なり。爾曹彼に在て全備することを得なり。」(哥羅西二〇九、十)

以上は、實に、在世中キリストに師事し、直接に其感化薰陶を受け、親しく其性格言行を観察目撃したるキリストの直弟子、及び彼等に由りて宣傳せられ、神靈の啓示によりて、其靈的實在者として、キリストを信じたる使徒の、公明正直なる告白なり。爾來世々の聖徒及び信者も、キリストを以て造化の中心本源となし、圓滿完全なる、神の最高示現として、神と均しく、人類の禮拜を受くべき救主なる

圓滿完全なる神の示現

りと信せり。此信仰は、キリスト教の生命にして、信者の最も尊き實驗なり。

「汝等、心に憂ること勿れ、神を信じ、亦吾を信すべし。吾父の家には第宅多し。然すば、我預て汝等に、之を告べきなり。我汝等の爲に所を備へに往く、もし往て我汝等の爲に所を備は、又來りて汝等を我に納べし。我居所に、汝等をも居しめんとなり。汝等我往處を知、また其道を知。トマス曰けるは、主よ、我等汝の往所を知らず。如何にして其途を知んや。イエス彼に曰けるは、我は途なり、眞なり、生命なり。人若我に由ざれば、父の所に往くこと能はず。若汝等我を識ば我父をも識べし。今より汝等彼を識なり、已に汝等彼を見たり。ヒリポ彼に曰けるは、主よ我等に父を示し給へ、然ば足り。イエス彼に曰けるは、ヒリポ我かく久しく汝等と偕に居しに、未だ我を識ざる乎。我を見し者は父を見しなり。何ぞ父を我等に示せと云や。我父に居り、父の我に居ことを信せざる乎。我汝等に語りしことは、自ら語りしに非ず、我に居父、その行をな



せるなり。我は父に居、父我に居と我つげし言を信せよ。若信せずは、我業に因て之を信すべし。」(約翰十四〇一―十一)

キリストの人格及び意識

「我を見し者は父を見しなり、父と我とは一なり」とは、キリストの全人格を貫ける意識にして、彼は此意識と自覺とにより、自己を以て凡ての人類の信仰の對象となし、其崇拜歸服を要求して憚らず。曰く吾を信せよ、我に従へ、我に來れど。其教の、學者の如くならず、權威を有るもの、如くなりしは、之を聽ける民衆の駭きあへる所にして、其湖上に風波を叱責し給へる神子の風采、其ピラトの廳に於て審問に應じ給ひし、堂々たる王者的態度、其他、彼の言行、一として神的光彩を放たざるなく、彼を捕へんとして遣されたる捕吏をして、未だ此人の如く言し人あらずとて、手を空くして歸去らしめ、或は十字架の最後を目撃したる百人の長をして、實に此人は神の子なりと嘆せしめたる如き、必ずしも、當時の弟子、其後の信者のみならず、彼の言行を公平に觀察する者は、何人も其卓率超

キリストの愛

絶せる人格を認めざるを得ず。世には偽りの預言者尠からず、或は神子の示現なりなど誇稱するものあり。現時我邦にも此種の人あり。然れど、其性格言行、果して之に相應しきものあるや。其自覺の高調に達するや、多少世人の注目を惹く如き、奇異脱俗の言行なきにあらずと雖も、到底古今獨歩なるキリストと比較すべきにあらず。眞に神より出でざる彼等は、終に永く榮ふること能はざるなり。キリストの性格中、最も著しきものは愛なり。天父の最高完全なる示現として、特殊の地位を占め給ふ所以、亦實に茲に存す。彼が二年餘の傳道に於て、或は鬼を逐出し、或は諸般の疾病を醫し、死せる者を甦らせ、難める者を慰め、虐げらるゝ者を助け、能く貧者弱者の友となり、救主となれるは、實に人類に對する、神の愛の發動にして、其肉體の病苦患難を除ける如きは、唯其一端のみ。彼は「牧者なき羊の如く、衆人なやみ、又流轉になりし故に、之を見て憐み給ひ」(馬太九〇三六)、善き牧者が、其迷へる羊を尋ねて、遠く山路にさすらへる如く(路加十



五〇四一六、又牝鶏が、其雛を翼の下に集めんとせる如く（馬太二三〇三七）、又放蕩  
 兒の悔改歸順を喜ぶ父の如く（路加十五〇十一三三）、神を離れて流離せる人類の靈  
 魂に、無限の同情と愛憐を澆ぎ、東奔西走、席暖まるに違なく、あらゆる困苦患  
 難を冒して、之が救済に盡瘁し給へり。「吾を遣し、者の旨に遵ひ、其工を成畢る、  
 是吾糧なり」（約翰四〇三四）と。彼の畢生の志願と努力とは、天父の旨に遵ひ、人  
 類を罪惡より救ひ、神の前に歸順せしむる外あらざりしなり。而かも頑迷にして、  
 聞けども聞かず、見れども見ざる人類の罪惡は、却て此愛に反抗を企て終に神の子  
 を十字架に釘けて殺せり。然れど、是は初めより豫期せられたる所にして、斯く  
 迄に罪惡に囚へられたる人類を救ひ、其罪を悔改めしめて、父なる神に歸順せし  
 めんには、到底避く可らざる犠牲たりしなり。

「人其友の爲に生命を捐るは、此より大なる愛はなし」（約翰十五、〇十三）

「吾父我を愛す。そは我再び生命を得んが爲に、命を捐るが故なり。我より之を

キリスト  
の犠牲

奪ふものなし。我自ら之を捐るなり。我之を捐るの權能あり、亦能く之を得る  
 の權能あり。吾父より我この命令を受たり」（約翰十〇十七、十八）

愛の極致は犠牲なり。人の肺腑に貫き、心魂に徹し、泣て昨非を懺悔せしめ、翻  
 然新なる生涯に入しむるものは、唯此犠牲の愛なり。キリストは、天父の旨を受  
 けて、此犠牲の愛を完うし給へり。子なるキリストの犠牲は、天父自身の犠牲な  
 り。蓋父と子とは一なればなり。神人類の爲に犠牲となり給ふ。是一見餘りに荒  
 唐無稽の如く考へられ、或は一種詩的神話を讀むの感ありて、古往今來、頑迷に  
 して疑深き人々がキリストの救済に與かるを得ず、依然として、罪惡の中に煩  
 悶する所以なれども、耳ありて聞ゆる者は聞くべし、目ありて見る者は見るべし。  
 是實に信すべくして疑ふ可らざる史的事實にして、又實に幾億千萬の信者の動か  
 すべからざる經驗なり。其十字架の價値内容の、如何に尊く難有きかは、其信仰  
 の發達と、靈的實驗の増進と共に、益深く味はれ、愈切に感ぜらるべし。キリス



トの十字架は、其人類救済の事業に於る、畫龍の點睛なり。是ありて、首尾一貫、生氣躍動、永へに人類救済の靈能たることを得るなり。それ十字架の教は、沈淪者には愚かなるもの、我等救はるゝ者には神の能たるなり。〔哥前二〇一八〕。然り、キリストの救ひの、言辭にあらすして、能力たり、空想にあらすして、事實なることは、キリスト教の特色にして、吾等人類に取て、最大の祝福なり。〔信せよ、然らば救ふゝことを得ん〕。讀む人、何ぞ速かに信じて其祝福に與からざる。

第六章 キリスト教の罪惡觀

「噫汝等禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ。汝等は、白く塗たる墓に似たり。外は美しく見ゆれども、内は骸骨と諸の汚穢にて充。此の如く、汝等も亦外は義しく人に見れども、内は偽善と不法にて充り」。〔馬太二三〇二七、二八〕

一人の義あるなし

「蓋我等、既にユダヤ人も、ギリシヤ人も、皆罪の下に在ことを證せり。録して義人なし、一人もあるなしとあるが如し。明達者なく、神を求むる者なし。皆曲て、全く邪となれり。善をなすものなし、一人もあるなし。其喉は破れし壁、その舌は詭詐をなし、其唇には蝮の毒を藏り。其口は詛と苦にて満し。其足は血を流さんが爲に疾し。殘害と苦難は、其途に遺れり。彼等は平康なる道を知らず、其目の前に神を畏るゝの懼あることなし。〔羅馬三〇九一七〕」

「愚なる者は、心の中に神なしと云り。彼等は腐れたり。彼等は憎むべき事をなせり。善を行ふものなし。エホバ天より人の子をのぞみ見て、悟る者、神を尋る者ありやと見給ひしに、皆逆き出て、悉く腐れたり。善をなすものなし、一人だにあるなし。〔詩篇十四、〇一三〕」

何れの時と何の處とを問はず、神を信せざる個人と社會にして、如上の痛切なる宣告に對して、能く辯解反證をなし得るものありや。世には、往々吾嘗て國家の



法律を犯さず、人を害はず、吾心事行動、俯仰して天地に愧ずなど、廣言するものあり。是偶、其道念低く其良心の感覺遲鈍なるを表明するものにて、所謂罪惡を以て、單に言語動作の表面に顯れたるものとなし、向上の理想なく、自己を度るの標準、極めて低きが爲なり。曇れる鏡面に對しては、辛うじて自家の妍醜を別つべし。其塵垢に汚れたるは、能く辨ずること能はず。然れど、一度淨玻璃の明鏡に對す、誰か自己の醜汚なるに驚き耻ぢざらんや。我心鏡にうつるものならば、さこそ姿の醜かるらめ。苟も道念の光明かにして、良心の知覺鋭き者、誰か此感なからんや。

キリスト嘗て税吏罪ある人と共に食せし時、自ら義しとせるパリサイ宗の人、之を見て、キリストの弟子に向ひ、之を非難したるに、イエス之に答へて曰く「康強なる者は醫者の助を求めず、唯病あるもの之を求む。吾來るは、義しき人を招く爲にあらず、罪ある人を招て、悔改めさせん爲なり」と。(馬太九〇九—十三参照) 一知

半解の人、キリストの此言を捉て、傲然自ら適用し、吾は身體壯健に、地位あり、財産あり、我言動は能く社會の信用を博し、吾常識は能く處世の道に於て、吾を指導するに足る。吾に何の罪かある、亦何ぞ悔改めを要せんや、亦何ぞ神の救を仰がんやなどと唱へ、又は「心だに、誠の道にかなひなば、祈らすとても神や守らん」と。其誠の道に合ふことの至難なるを見ずして、輕々しく吾不信心を吹聴する人あり。斯る人も、深夜人定りて、靜かに吾半生の經歷、思想、言行等を回顧し、又吾が現在の志望、生活を吟味せば、衷心忸怩たるの感なきもの、果して幾人かある。

無病健全なりと云ふも、唯其肉體に限り、其心靈の缺陷精神の不完全に關しては、毫も自ら覺らざる也。諸の天は神の榮光をあらはし、穹蒼はその手の工を示す。此日言を彼日につたへ、此夜智識を彼夜に送る。語らず、言ず、その聲聞えざるに、其響は全地に浴ねく、其言は地の極にまで及ぶ」(詩十九、〇一—四) 所の此神の



善を行はざるは罪なり

榮光を認めず、此神の言を聞かざるものは、其靈眼盲目、其心耳聾せるが爲ならずや。其他、生活の中心、唯利己主義にして、人の難を見て赴かず、人の急を知りて救はず、義を聞きて起つ勇なきが如きは、手足の自由を失へる者と一般、明かに精神的不健全を證せるにあらずや。或は飲酒喫煙、其他の惡癖陋習を廢止せんと欲しながら、習慣の方と嗜慾の念に打勝つ能はず、其害惡を知りつゝ、猶之を持続する如きは、心靈上の不隨病に罹れるにあらずや。一人善を行ふことを知りて、之を行はざるは罪なり（雅各四、〇七）單に惡を爲ざるを以て無罪と謂はず、進んで善を行はざるは罪なりと斷ず。是キリスト教倫理の嚴正高大なる所以にして、此標準に照するときは、誰か自ら罪なしと斷言するを得るや。況んや、眞善美の極致なる神前に立ち、自ら顧みて、能く恐懼戰慄せざるを得るや。

此故に、大聖孔子は、「義を聞いて従る能はず、不善改むる能はず、是吾憂なり」と嘆じ、キリストの弟子中最卓越したるパウロは、「吾願ふ所の善は之を行はず、却

て願はざる所の惡は之を行へり。若吾願はざる處を行ふときは、之を行ふ者は、我に居る所の罪なり。是故に、吾善を行んと欲るときに、惡の我に居る此一の法あるを覺ゆ。蓋我内なる人に就ては、神の律法を樂めども、我肢體に他の法ありて我心の法と戦ひ、我を擄にして、我肢體の中に居る、罪の法に従はざるを悟れり。噫我困苦人なるかな。この死の體より吾を救はん者は誰ぞや」（羅馬七〇一九—二四）と絶叫せり。

それ人の道念發達するに従ひ、良心の知覺益鋭敏となり、從來何等良心の咎めを感じず、平氣に行ひ來りし事が、正しく罪惡たりし事を悟り、我れ自己の金錢を以て自己の好む所を爲す、飲酒漁色、亦何の耻づる所ぞ。國法を犯さず、人を害はざる限り、我意の欲する所を行ふ、亦誰をか憚らんなど放言し、自我満足の肉的生活を營みしもの、漸く昨非と感じ來り、是迄外部の言語動作が、他人に關係し、影響する點にのみ自家の責任を感じしもの、今や人知れぬ我内心のあら



心靈覺醒の第一着

ゆる不義不正、冷淡不親切等に對して自ら、耻ぢ懼れ、嘗て自ら義とし、罪なしとなしたるもの、今や完全なる理想の標準に照して、餘りに懸隔ある我靈性の缺陷と陋劣とに言ひ難き苦悶痛悔の涙を澆ぐに至る。此煩悶は、心靈覺醒の第一着歩にして、人類が神の救に與かり向上發展する首途なり。「それ神に循ふ憂は、悔なきの救を得るの悔改めに至らしむ。然れど、世の憂は、死に至らしむ」。(哥後七〇)讀者願くは先づ汝自身を知れ。内觀省察、深く心靈の有様如何を顧みよ。嚴正高尚なる道徳の標準を以て自己の思想言行を批判せよ。而して其缺點と罪惡とに對する自覺起らば、願くは來りて神の救済に與かり「此死の體より我を救ん者は誰ぞや。是吾等の主イエスキリストなるが故に神に感謝す」との、保羅の實驗に參せよ。

第七章 救主としてのキリスト

「自ら欺く勿れ、神は慢るべき者にあらず。蓋人の種ところのものは、亦その種ところと爲なり。己が肉の爲に種ものは、肉より敗壞ものを穫り、靈のため種ものは、靈より永生を穫るべし。善を行ふに應ずる勿れ。蓋もし倦ことなくば、我等時に至りて穫取れば也。」(加拉太六〇七—九)

「罪の價は死なり。神の賜ものは、我等の主イエスキリストに於て賜はる永生なり。」(羅馬六〇二三)

播く者は、種取ざるべからず。善惡何れにても、其種く所により、其結果を受けざる可らず。暴飲暴食すれば必ず胃腸を害ひ、其他何事にても、度を過し、節を失ひ、攝生の道を誤れば、疾病を醸すこと、是生理上の天則なり。世には自家の健康を待み、我肉慾の要求に任せて、放縱不節制の生活を營み、而も靚面に其惡結

播く者は種取らざる可からず



果の顯れざるを見て、吾健康を誇る人尠からずと雖も、因果の法則は破る可らず。斯る人は、其晩年に及びて疾病に難み、或は其得意の時代に於て、忽焉頓死する如きことあり。僥倖にして自身免れたるものは、其結果子孫に顯れ、或は病弱或は瘋癲白痴の子を擧ぐる如き、世間其實例に乏しからず。是所謂吾肉の爲に種く者は、肉より敗壞るものを穢り取るなり。

肉體生理に關する此天則の誤らざる如く、人の精神道德に關する大法、亦儼として違ふ可らず。有強無形を問はず、外部と内心とを論せず、人の犯したる罪惡は、必ず其報を受けざる可らず、其結果を刈取ざるべからず。其罰を蒙らざる可らず。積善の家には餘慶あり、積惡の家には餘殃ありとは、人類を支配する道義の大法なり。世に惡運強き人あり。天を畏れず人を憚らず、一生の行動、唯殘忍酷薄、或は放逸不羈、あらゆる罪惡を犯して顧みず、而も其末路必しも悲惨ならざるが如きあり。又天を畏れ、人を愛する、誠實敬虔の人にして、或は疾病に苦み、或は

災厄困難交も至りて、終生悲境に呻吟せるが如く見ゆるものあり。近眼者流は直に此皮想の事實を捉へて、神の存在を否定し、天道の是非を疑ふに至る。然れど「神は人の行に循ひて、各人に其報をなすべし。耐忍て善を行ひ、榮光と尊貴と不朽とを求る者には、永生をもて報いん。然れども、争鬭をなし眞理に順はず不義につく者には、報ゆるに忿りと患難辛苦とを以てす。此はユダヤ人を始め、ギリシヤ人、凡て惡を行ふ人に及ぶなり。ユダヤ人を始め、ギリシヤ人凡て善を行ふ人には、榮光と尊貴と平康を以て報ゆべし。是神には偏視なければ也」。(羅馬二〇六—十二)「それ審判は、吾福音に言へる如く、神イエスキリストを以て、人の隠れたることを鞠かんに成るべし」。(同二〇十六)「蓋我等必ず皆キリストの臺前に出で、善にもあれ、惡にもあれ、各身に居りて爲し所に循ひ、其報を受けべきものなればなり。」(哥後五〇十) 必しも外部に顯れたる言語動作に限らず、人知れず抱きし邪念惡想も、皆一度は其總勘定を要求せらるべし。其人の生前に此事な



くば、其死後に於て必ず其應報あるべし。是明かに神の吾等に告げ給ふ所なればなり。

又顔回またぐわんくわいの天折てんせつ盗妬とうとの壽じゆを以て、天道てんたうの是非せひを疑うたがふ如きは、抑皮想おしひきさうの見けんなり。神の審判さはんは、外面肉體ぐわいめんにくたいの上うへにも表あらはれるれども、最も多く其心靈そのしんれいの上うへに行おこなはる。孔子曰く、「蔬食そしょくを飯くひ、水を飲のみ、肱ひつを曲まげて眠ねむる、樂たのしみ亦また其中そのうちに在あり。不義ふぎにして富とみ且かつ貴たよきは、我われに於おいて浮雲ふううんの如ごとし」との天てんを樂たのしみ、道みちを愛あいする人は、清貧せいひんに安やすんじ、敢あへて必かならずしも富貴利達ふうきりたつを求もとめず。彼等かれらの尊たよぶ所ところは物ものに在あらずして心こころに在あり。其不幸ふかは、外部ぐわいぶの状態じやうたい如何いかんに存ぞんせずして、内心ないしんの安否あんひ如何いかに存ぞんす。故ゆゑに財産名譽ざいさんめいよを有いうする者ものにして、衷心こころしん疚やくしきものあらば其金殿王樓そのきんぜんぎやうらうも亦また牢獄らうごくに異ことならざるなり。心の鬼おにが身みを責せむるとは、良心りやうしんの呵責かしやくを言いふなり。惡事あくじ匪行ひかうをなし、幸さいはひに國法こくはふを脱だつし、又社會またしゃくわいの制裁せいさいを免まぬかると雖いへども、疵持きずもちつ足の氣味きみ惡わるく、風聲鶴唳ふうせいかくれいにも肝きんを冷ひやし、一生しやうを不安ふあんの裡うちに送おくる如ごとき、既に其天罰そのてんばつの一部いぶを享受きやうじゆせるなり。

内心の安否

罪なき者最も能く罪を感ず

「我等が心若我等を責ば、神は我等が心より大なるにより、凡ての事を知り給はざるなし」。(約壹書三〇二十) 良心の呵責は、實に人の罪に對する神の呵責なり、心靈的刑罰なり。心靈の煩悶苦痛は、罪惡の代價なり。然れども、人は到底罪惡の渦中に在りて、縱令良心の知覺鋭敏となり、心靈の覺醒著しく、罪に對する苦悶絶頂に達することも、未だ其罪惡の代價として充分なるだけ、痛切深刻なる實驗をなす能はず。圍中の豕は、臭中に在て、自ら其臭を感せず。不潔の不潔たるを、最も鋭く感ずるものは、最も清潔なる人ならざるべからず。罪の罪たることを、最も切に感ずる者は、罪なき人ならざるべからず。即ち最も深刻に、痛切に、罪の恐るべく、厭ふべく、憎むべきことを感ずるは、自れ自身、一點罪の痕跡を止めざる、聖善高潔の者ならざるべからず。子の放蕩無賴を歎き忿るは、其父程痛切なるはなし。此人類の罪惡に關して、最も痛切に感じ、義しき忿りと、愛の歎きとを抱き給ふは神なり。神は、此聖旨を其子イエスキリストに於て吾等人類に表明



し給へり。

キリスト敵手に渡され給ふ前、ゲッセマ子の園に於て祈り給ふや、弟子等に向ひ「我心痛く憂ひ死ぬ計りなり」(馬太二六〇三八)と告られ、「我父よ、若叶は此杯を我より放ち給へ。左れど、我心の儘を爲んとするにあらず。聖旨に任せ給へ」(同上三九)と、三たび繰返して祈り給へり。「イエス痛く哀み、切りに祈れり。其汗は血の滴りの如く地に落たり」(路加二二〇四四)と。其苦悶悲痛の如何に激しかりしかは、想察するに餘りあり。是れ豈敵手に渡され、死に就くを恐れ給ひし爲ならんや。又救済の事業が、未だ全く緒に就かずして挫折せんとするを悲み給ひし爲ならんや。是等の事情、或はキリストの苦悶の原因たりしならん。然れど、彼をして死る計りに苦ましめたるは、實に人類の罪惡なり。其が、純善無垢なる彼の靈鏡に映せし姿の、如何にも淺間しく、醜く、神の前に耻かしく恐ろしく、神の聖善と、如何に相反き居るか。神の義しき怒りの、如何に嚴正なるか。而かも、

キリストの苦難

其愛の歎きの、如何に痛切なるかを、明確深刻に意識し給ひし時、彼の心は、死ぬるばかりに苦み悶へたり。即ち、彼は凡ての人類が正に受くべくして受け得ざる、罪の報いを受け、正に感すべくして感じ得ざる、罪の自覺の苦みを嘗め給へるなり。而して此苦痛は、其十字架の上に於て絶頂に達せり。「我神々々、何ぞ我を遣て給ふや」との叫びは、能く之を現せり。彼は此の如く、人類罪惡の代價として、十字架に犠牲の死を遂げ給へり。罪なき者、罪ある者に代り、義者、不義者の爲に死し給へり。其十字架にかゝり給ふや、「父よ彼等を免し給へ。彼等は其爲す所を知らざればなり」(路加二三〇三四)と祈り給ひしは、單に彼を十字架に釘けたる、當時の敵人の爲のみにあらずして、永へに吾等人類の爲に、献げらるゝキリストの祈なり。

「我等神を愛するにあらず、神我等を愛し、我等の罪の爲に、其子を遣して挽回の祭物となせり。是即ち愛なり。」(約翰一書四〇十)



「是故に、我等信仰に由て義とせられたれば、神と和ぐことを得たり。此は我主イエスキリストに頼りてなり。又我等、彼により、信仰によりて、今居るところの恩に入ることを得、かつ神の榮光を望みて欣喜をなす。第是のみならず、患難にも欣喜をなせり。蓋患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は羞を來らせざるを知る。こは我等に賜ふ所の聖靈に由て、神の愛我等の心に灌漑はなり。我等なほ弱かりし時、キリスト定りたる日に及て、罪人の爲に死給へり。それ義人の爲に死る者殆ど稀なり。仁者の爲には死ることを厭ざる者もあらん、然ど、キリストは、我等のなほ罪人たるとき、我等の爲に死給へり。神は之に由りて其愛を彰し給ふ。今その血に頼て、我等義とせられたれば、況て彼に由て、怒より救るゝことなからんや。若我等敵たりし時、其子の死によりて、神と和ぐことを得たらんには、況て和ぎを得たる今、其生るに頼て、救るゝことを得ざらんや。」〔羅馬五〇一―一七〕

罪の赦

我等此キリストを信するにより、始めて罪の赦しを實驗し、良心の平和を得るなり、同時に、キリストの犠牲を餘儀なくせし我等の罪の、如何に恐ろしきかを、一層痛切に感じ、其赦罪の恵の如何に難有きかを思ひ、痛恨懺悔の涙は、感謝喜悅の涙と變じ、其愛に感激して、翻然新らしき人となり、神の子の聖き生涯を送らんと志すに至る。即ち赦罪の喜は、感恩の熱情となる。如此、汝等も我等の主イエスキリストにより、罪に就ては自ら死る者、また神に就ては、生る者なりと思ふべし。是故に、「汝等罪を死ぬべき肉體に王たらしめて、其慾に徇ふ勿れ。又汝等の肢體を、不義の器となして罪に獻ぐることを勿れ。死より甦りし者の如く、己を神に獻げ、また肢體を義の器となして神に事ふべし」〔羅馬六〇一―一三〕この訓戒を、心より服膺し、「我キリストと共に十字架に釘られたり。最早我生るにあらず、キリスト吾に在て生るなり。今吾肉體に在て生るは、我を愛し、我爲に生命を捨しもの、即ち神の子を信するに由て生るなり」〔加拉太二〇二十〕この確



信に達し、即ち飲むにも食ふにも何事を爲すにも、神の榮光を顯はさんことを勉め、嘗ては自己中心にして、肉慾の満足のみを圖り、罪惡渦中に展轉反側せる者、今や、父なる神を中心として、己が思想、言行、事業、一に其聖旨に合はんことを期し、向上發展、一人、即ちキリストの満足れるほどなる迄に至り、」(以弗所四〇十三) 「愛を以て眞理を行ひ、長ちて凡ての事、首なるキリストに效はしめん」(以弗所四〇十五)との神意に答ふるに至る。此に至て、神の救濟事業は完成せられ、人類衷心の要求も、充分に満足せしめらる。キリストが人類の救主として、獨歩の地位を占め給ふ所以、亦實に茲にあり。

「我は途なり、眞なり、生命なり。人若し我に由ざれば、父の許に行くこと能はず。」(約翰十四〇六)

「汝等我に居れ。さらば、我亦汝等に居ん。枝若し葡萄樹に連らざれば、自ら實を結ぶこと能はず。汝等も我に連らざれば、亦此の如くならん。我は葡萄樹、なん

ぢらは其枝なり。人もし我に居り、我亦彼に居ば、多くの實を結ぶべし。蓋はもし汝等我を離るゝときは、何事をも行能はざればなり、人若し我に居らざれば、離れたる枝の如く、外に棄られて枯るなり。人これを集め、火に投入て焚くべし。」(約翰十五〇四一六)

キリストは單に、我は途なり眞なりと言はず、生命なりと言ひ給へり。宇宙に漲れる、此大生命と連結抱合して、此に眞の生命あり。單に眞理たり。大道たるに止まらず、實に此大生命たる處に、キリストの特色は存せり。之を要するに、キリスト教の極意は蓋し人類に對しては、神の獨子として父なる神を啓示し、神に對しては、彼自ら一點罪惡の自覺もなく、完全無垢の身なりしに拘らず、全人類の代表者として、其罪を負ひ、其犠牲となり、贖ひとなり、同時に理想的全人として、生活の模範となり、向上の標的となり給ひし史的人格、即ち一たび人類の爲に死を味ひ、墳墓の中に下り給ひしが、終に死の權威に勝ちて甦り、永遠に



生きて働き給ふキリストを信じ、之と交り、之に連り、葡萄の枝が其根幹より養液を受けて果を結ぶ如く、吾等も一個の小キリストとなりて善果を結び、以て神の恵に應へ、其聖旨に副ひ、其聖意を悦ばせ奉らん事はなり。キリストは、一面完全なる神の親心の示現なれども、同時に至上無比なる孝子の活模範なり。我等も彼に倣ひて、神に喜ばれ、愛せらるゝ孝子となることを得ば、此に吾等の救ひは成就せられ、人類進歩の理想は達せらるゝなり。

罪惡の自覺に煩悶する者は、速かに來りて、キリストに頼り、赦罪の恵と新生の能を受けよ。人生の苦闘に疲れ、失意落魄、生甲斐なき日を送れる者は、來りてキリストの大生命に觸れよ。空しく理想の光明に憬がれ、向上の一路にさすらふ者は來りて、光なり生命なるキリストを仰げ。未だ何等の靈的飢渴を感せず、肉的生活に満足せる人は、キリストに接して、靈の覺醒を求めよ。蓋キリストを離れて、眞の生命なるものなく、キリストと連結抱合せざれば、人類は遂に凋衰

死滅を免れざること、恰も根幹より切り離されたる枝の如く、生る名ありて其實は死ねるものなればなり。願くは何人も來りてキリストに接し、其救ひに與かり、高潔有益なる生涯を送りて、人類の本分を盡し、人生々活の意義を完うせよ。

### 第八章 救濟の靈能

「我は、ギリシヤ人及び異邦人、また賢人および愚人にも、負る所あり。是故に、我力を盡して、福音を汝等ロマに在人々にも傳ふことを願ふ。我は福音を耻とせず。此福音は、ユダヤ人を始め、ギリシヤ人、すべて信する者を救ふことの神の大能たればなり。」(羅馬一〇四—一〇六)

「それ十字架の教は、沈淪者には愚なる者、我等救るゝ者には、神の大能たればなり。」(哥前一〇十八)

「ユダヤ人は休徴を乞ひ、ギリシヤ人は智慧を覓む、吾等は十字架に釘られしキ



リストを宣傳ふ。是れユダヤ人には礙く者、ギリシヤ人には愚なるものなり。然  
ど、召れたる者には、ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも、キリストは神の大能、亦  
神の智慧なり。」(哥前二〇三二—二四)

是れ大使徒パウロを始め、他の弟子等及び後世の熱心なる信者が、福音を宣傳す  
る、最高の動機を宣明するものなり。キリスト教は、此世の智慧學問の所説にあ  
らず單に斯くすべし斯くなす可らずと云ふ倫理の教にもあらず。唯キリストの十  
字架を信するに由て、上より賜はる不思議なる能力なり。即ち信する者をして、  
其赦罪の恩恵に感泣せしむると同時に、舊き自己と其罪とを捨てしめ、神の子と  
して、潔き有益なる生涯を送らんと志を起さしめ、其思想言行全く別人の如  
く、眞に新生の實驗をなさしむる偉大なる救済の靈能なり。  
世間往々、キリスト教の經典に何等の高尙なる哲理的辯論や學究的言説を含まざ  
るを見て、唯情感を主とする、卑近淺薄の宗教なりと論ずるものあり。彼等は、

不思議な  
る能力

現代のギリシヤ人なり。何ぞ知ん、彼等の卑近淺薄なりと嘲ける處に却て深奥な  
る神慮の存することを。古來ユダヤ人は、宇宙の大靈たる獨一の神を信じたり。  
此生ける神を啓示するキリストは、改めて有神論を説く必要なく、隨處に神を見  
神に交り、面と面と相接する如く、常に「父よ」どの親しき語を以て祈り、我が言  
語動作は即ち神自身の言語動作なり。我を信する者は我を遣し者を信するなり。  
我を見る者は父を見るなりとの、父子一如の意識は、牢として動かす可らざるも  
のありき。是れ彼の言説の命令的にして、其片言隻句にも、常に神的權威を含む  
所以なり。亦何ぞ、巧妙なる倫理や、面倒なる談議を用ひんや。彼は空の鳥、野  
の百合を見て、直ちに天父の愛を語り、牧羊者と羊群とを以て、或は農夫と葡萄  
樹との喩を以て、神人間の密接なる關係を語り給へり。其教の簡明直截にして、  
能く人の肺腑を衝く所、是實にキリストの教の特色なり。  
此は是れギリシヤ人には愚かなるものなりき。爾來彼を信せざる多くの人々にも



神學

斯く見えたりき。然れど、一面此單純なるキリスト教も、他面に於てギリシヤ思想の影響を蒙らざるを得ざりき。即ちキリストの教を解釋し、其教理を組織する爲に、神學なるもの教會の中に起れり。其後、哲學科學の辯難漸く加はるに従ひ神學も發達し、又哲學科學の智識を以て、キリスト教々理を維持し、建設せんとする學者も輩出し、キリスト教は、此時代思想に相應したる、智識の衣裳を着るに至れり。故にキリストを信せざる學者、人物の尠からざる如く、彼を信する偉大なる學者人物亦乏しからず。今是等の人名を擧げ來らば、何人も輕々しくキリスト教を以て、合理的根據を有せざる迷信なりとは、斷言するを得ざるべし。然れど、是等の學問智識は、畢竟キリスト教の衣服なり、其本體にあらず。説明の方式にして、救済の事實にはあらず。隨つて時代に應じて變遷す。「是故に、神は傳道の愚なるを以て信するものを救ふを善とせり。」(哥前二〇二二)キリスト教今日の隆盛を來せしは、此等衣服外容の整頓、與つて力あるは論なきも、眞に人の

キリストの醫療

靈魂を救ひ、之をして新生の實驗を得しむるは、萬古不變なる活けるキリストと、其十字架を信するに由て賜はる救済の靈能なり。キリスト世に在して、傳道のため諸方を巡り給ふや、多くの盲者、啞者、聾者の如き性來の不具者、鬼に憑れて惱める者、手足のなへたる者、血漏を患へる者、癩病に罹れる者、諸種の疾病を持てるもの、到る處に治を乞ひ、其信仰の熱烈なる者に至ては、或は其衣の裾にだに觸れなば、我病は癒えんと信じ、或は主唯一言を出し給は、我僕は癒えんと云ひ、而して其信する如く彼等は皆癒されたり。凡そ目ありて見る能はず、耳ありて聞く能はず、口ありて語ふ能はざる不具者は、世に不幸なるものあらんや。若し之に見ること、聞くこと、語ることを得しむる者あらば、彼等は千里を遠しとせず、或は萬金を惜まずして治を乞ふべし。曾て盲者ありき。世間の厄介物として、路傍に座して人の憐みを乞ひ居たりしがイエスの來り給ふと聞くや、豫て其噂を開居たりけん、此人に頼まば、必ず我眼



開かるゝことを得んと、大聲にイエスを呼んで、ダビデの子よ、我を憐み給へと呼び、弟子等の制止も耳に入らず、只管にイエスの憐みを乞へり。イエスの、弟子をして彼を呼ばしむるや、彼は其表衣を打ち捨て、イエスの許に來り、イエスの汝吾に何をせられんと欲ふやとの、同情深き言を聞くや、彼は言下に、主よ見えなんことを欲ふと言へり。何ぞ其願の痛切なるや。イエス彼に、往け汝の信仰汝を救へりと、言ひ給ひしに、直に彼見ることを得、イエスに従て路を往けり。

(馬可一〇四六―五二參照) 從來物の黑白も辨せず、暗黒悲慘の裡に、味氣なき世を送りし盲者が、一朝にして見ることを得、萬象始めて其姿を示し、事々物々一として驚歎の種ならぬはなく、身は是れ新天地に生れたるの感あり。其喜悅と感謝知るべきなり。故に、彼はキリストより往けよと云はれたるに拘らず、彼と別れ去るに忍びずして、之に従ひ行きし所以なり。

以上は是れ一例に過ぎず。信じて彼に來る者は、如何なる者も癒され、其子或は

其僕の爲に治を乞へる者も、皆聞かれて、彼等の信する如く療されたり。此醫療の奇跡により、イエスは神の靈能を有する預言者なりとて、世人の驚歎と尊信を博し給へり。世の元始以來、うまれつきなる瞽者の目を啓し人あるを聞かず。もし此人神より出でずば、何事をも行得ざるべし。(約翰第九章參照) とは彼に由て癒されたる凡ての人、及び其實證を見たる親戚朋友等の、齊しく抱ける信仰なりしなり。彼等は是に依りて神を榮めたり。彼等は是より進んで、終に神より遣されたる救主として彼を信じ、其肉體のみならず、靈魂の救にも與かりしや否やは、聖書に記する處なきを以て、明言し難しと雖も、其中の或者の必ず然りしことは、推斷するに難からず。

されど、ユダヤ人の多數は、肉體の疾患を醫せしキリストの異能のみを認め、其觀面なる物質的効驗にのみ隨喜し、自己心靈の疾病を自覺せず、隨て靈的救主としてのキリストの性格、言動等を解するを得ず、終に其十字架に礙けり。



依然たる  
病心の疾

現今、我邦に於る幼稚なる信心なるものは、加持祈禱と云ひ、供物禮拜と云ひ、多くは此類なり。彼處の神は何の病に効驗著しと云ひ、此處の佛は何々の御願を聞き給ふと傳へ、親戚朋友、相唱和して尊信渴仰す、而かも其精神的方面の事は敢て知らざるもの、如し。此等の信心により、或種の疾病の癒さるゝあるは必しも否定す可らず。昨今隆盛に赴き來りし、天理教の如き、其教理としては靈肉共濟を主張すれども、實際に於ては、猶肉體治療の範圍を出ること能はざるが如し。吾等は此種の信心に由て多くの不思議なる御利益ありし話を聞き、又時に其實例を見たり。然れど、畢竟肉體の疾患癒されたりと云ふに過ぎず。或は息災開運の喜びを得たりと云ふに外ならず。其人格、精神、依然たる舊き人なり。物質界に齟齬として靈界の消息に就ては聊かも味ふ所なきなり。以て知るべし、肉體の疾病は人能く之を醫し、此種の信心亦或は効驗あるべしと雖も、人の心靈を根本より救ひ、其思想、言行、性格、事業に顯はれ、全く新たに生れたる別人の如

靈界の風色

き感あらしむる如きは、到底神の救済の靈能に俟たざる可らず。一誠に實に汝に告ん。人若し新に生れずば、神の國を見こと能はじ。」(約翰三〇三) 救済の靈能の人の心靈に働くこと、尙其肉體に於るが如きものあり。人一たび、此靈能を感じて靈眼漸く啓くるや、靈界の風色一として、刮目駭心の種ならざるなく、動もすれば、蹈迷ひし是非善惡の道も、今は明かに見え、淺間しかりし過去の我を顧みて、今更の如く驚き悲むと同時に、夢にだも知ること能はざりし、神の聖高純美なる榮光を仰ぎ、主キリストに由て顯されたる無限の慈愛を望み、慚悔痛恨の涙は、頓て感激謝恩の涙となり、嘗ては無住の荒家の如く思ひし此世界は、神の住み給ふ殿堂となり、從來左程の注意も惹かざりし日月、星辰、山河、草木、禽獸、蟲魚に至る迄、神の無限の智能と、人類の爲に圖り給ふ、無量の恩寵を顯すものとなり、一掬の水、一片の食にも、神の恵を認め、日は麗らかに照し、月は清く輝けども、神を讚美することを知らず、花は美しく咲き、鳥は樂し



く歌へども、嘗て神に感謝することをせず、全く精神的盲者たりし者、心眼茲に開けて、萬象其面目を改め來り、事々物々に、神の榮光と慈愛を認めて感謝するに至る。

一度此新天新地に生れ更りたる者は、能く良心の聲に聞き、神靈の囁きに從ひ、其手足は神の喜び給ふ業の爲に活動し、其口は神を讚め、又人を慰め、嘗ては我肉慾を充す器として、或は酒に酔ひ、或は色に耽り、我物顔に濫用せし我身體も、今や義の器として神に献げ、其御用に供するに至り、其思想の中心、唯自己のみなりしが、今やキリスト我主となり、飲むにも、食ふにも、何事を爲にも、神の榮光を顯さんことを期するに至り、嘗ては理想なく、向上なく、或は肉的快乐の中に、或は我から招きし不幸患難の裡に、一生を空しく送らんとせしもの、今や數ならねども、我も神の子の一人として、我性格の圓滿充足を期すると共に、高尙有益なる生涯を送らんと志すに至る。傲慢尊大なる者は謙遜柔和となり、強慾

非道の者は、清廉親切となり。懶惰放逸の者は、勉勵謹直となり、柔弱怯懦の者は、剛健勇猛となり、其他道德上の惡癖、缺點、皆癒されざるはなし。又財を窃み、人を害ひ、國法の制裁を受けたる惡人、或は人の指彈を受け、社會の擯斥を蒙むる如き業體のものも、一度此靈能を感受するや、翻然悔悟して新生涯に入る。酒造家にして此救ひに與かり、斷然傳來の家業を抛つものあり。娼樓の主人にして此靈能に感じ、翻然不正の業を捨て、正業に歸するあり。是等の驚くべき變化、更生の事例は、古今内外枚舉に遑あらざるなり。キリスト曰く、「我を信する者は吾爲す所の事を行ん。且此より大なる事を行べし。」(約翰十四〇十二) 此靈能は、愚なる者を慧くし、弱き者を強くし、惡き者を善し、厄介物を有益なるものとなし、價値なき者を貴きものとなすなり。若しそれ、其人の性得優れたる大器たらんには、更に之を純化し、聖化して、偉大なる神の器とならしむるなり。ガリラヤ湖邊の漁夫一たび召れて人を漁る者となり、此靈



能を感受するや、彼等は正々堂々として、學者の中に、王侯の前に、キリストの福音を宣傳したり、此靈能一たびパウロを化するや、嘗てキリストを迫害し、其信者を捕へ、或は獄に下し、或は殺せし者、一變して異邦人の大使徒となり、キリストの爲に心身を献げ、其人格と熱心とにより遂に世界的傳道の門戸は開かれたり。此靈能一たびオウガスチンを救ふや、放逸不羈の罪の子は篤信敬虔なる神の子と化し、能く當代靈界の明星たりしのみならず、後世萬代の師父として、永く其遺薰餘芳を俾はしむ。此靈能マルチン、ルウテルを囚へて、宗教改革の大業成り、バンヤンに働きて、其感化聖書に次ぐて天路歷程を著はさしめ、或はウエスレーの信仰復興の大活動となり、或はムーデーの救靈運動となり、ウイルバアフホースの奴隷廢止となり、ジョン、ハワードの監獄改良となり、デヨーヂ、ミユラーの孤兒院となり、ブウス大將の救世軍となれり。此外エリザベスフライの如き、ナイチンゲールの如き、ウイラーの如き、懺弱なる婦人の身にして、或

は博愛人道の爲め、或は社會改善の爲め、能く世界的偉業を成し得たるもの、皆此靈能の感化に由らざるはなし。我邦に於ても、岡山孤兒院の如き、京都同志社の如き、其他慈善矯風の事業、教育の事業、社會改良の事業の如き、何れも救済の靈能を實驗したる人々が感激報効の至誠に出でたる結果に外ならず。此驚くべき感化新生と、之より生じたる結果とは、眞に靈界の偉觀にして、吾等は唯神の靈能と其愛とを感謝讚美する外あらざるなり。此靈能は、時と處とを問はず、人と其境遇とを論せず、信する者には、皆此驚くべき實驗をなさしむるなり。或は牢獄の中に、破屋の裡に、或は山巔に、海上に、或は社會の競争場裡に、或は病氣靜養の床上に、其慈光を仰ぎ、其靈雨に浴することを得るなり。失意落魄、世を果敢なみて自殺を思ひし者、忽ち救はれて新なる元氣と希望とを與へられ、有益なる生涯に移れる如き、或は瀕死の病床に其救ひを受けて、平和と喜悅と感謝との中に世を辭し、其最後の美しきに家人親戚



を感動せしむる如き、或は此靈能を感受せる者、永く病苦と貧困の裡に在りながら、猶感謝と讚美を絶たず、常に平和と希望に充たされ、神國の擴張、知己朋友の救ひの爲に祈り、其不如意の境遇に於て能ふ限りの善を行はんとする如き、孰れか其靈能活動の實證ならざるものあらんや。我邦に於ても、多年病床に臥し、あらゆる患苦と闘ひながら能く神の恵みを證せし者、曩に澤山保羅氏あり、次で徳永規矩氏あり、最近に綱島梁川氏あり、原忠美氏あり、皆病の爲に、故人となりたれども、其熱信篤行、人をして永く其遺薫を偲ばしむ。是等の知名卓越なる人士の外、隠れたる小澤山、小梁川は到る所に見出され得るなり。此救済の靈能を受けたる者は、如何なる境遇に處し、如何なる場合に臨むも、決して失望落膽することなく、又自暴自棄に陥ることなく、彼等は能く耐忍び、待ち望み、能く闘ひて、遂に勝利を制す。凡ての事悲觀せずして樂觀し、苦慮せずして感謝し、煩悶せずして信賴するなり。蓋我如何なる狀に居るも、それを以

て足れりとすることを學べばなり。吾貧賤に居るの道を知り、又富厚に居るの道を知り、飽くことも、飢ふることも、豊むことも、歎しきことも、諸ての事に於て、我之を熟練せり。我は我に力を與ふるキリストに因りて諸の事を爲し得るなり。〔腓立比四〇十一—十三〕とのパウロの告白は、眞に救れたる者の均しく有する實驗なり。所謂逆境に働く靈能の偉大強勢なる、實に驚歎に餘りあり。嗚呼、此の如き救済の靈能は、自己の不完全を知り、人生の轉變を観する個人の、最も要するものならずや。又道徳すたれ、風紀紊れたる我邦の、最も切に要求するものに非らざる乎。

第九章 キリスト教と其理想の實現

世に説をなす者あり。神子の生活と云ひ、天國の實現と云ふ如き、如何にも高尚にして、結構ゆるもの、様に聞ゆれども、是れ畢竟人間の本性を知らず、社會の



實狀に通せざる迂遠の空想に過ぎず。人は如何に立派な事を云ひ、或は鹿爪らしき事を口にしても、畢竟は動物的本能に刺激せられて動く肉塊に過ぎず。社會は如く此人を以て組織せらる。其醜陋淫靡、罪惡横溢せる、固より其處なり。國法あり、道德ありて、僅かに人々相食むの暴狀を防止し、白晝公然の匪爲醜行を取締るを以て、辛うじて社會の體面を維持修飾すと雖も、一たび其裏面を伺はんか、畢竟するに、優勝劣敗、弱肉強食なり、醜穢百出、罪惡横行の體を奈何せん。然らば、人は唯宜しく自己の生存を完ふする爲に努力すべし。自家糊口の計に急なるべし。自家の富と勢力を養ふに専らなるべし。之を得ば、飲酒むべし、色漁るべし。美衣を纏ひ、美食に飽き、大厦高樓に居して、人生の榮華を極め、あらゆる肉的要求を満足せしむべし。亦何の違ありてか、人道を言ひ、博愛を言はんや。又何の餘裕ありてか、空想に近き神の子の生活や、天國の實現に注意を拂ふことを得んや。是等は單に人間の理想としては可ならんも、現實の社會に於ては、

到底迂闊の閑問題たるを免れずと。

果して動物  
的方面  
ののみなる

此の極めて尤もらしき議論は、目下我邦の上下を通じて、頗る勢力あるに似たり。然れど、斯る議論の皮想淺膚にして、人間衷心の要求を無視し、人類進歩の理想と兩立せず、却て人類をして、向上する代りに墮落せしめ、社會をして、進歩する代りに退歩せしめ、國家と國民とをして、振起隆興する代りに衰頹亡滅を免れざらしむるのみならず、古今東西、個人と國民とを問はず其實證、頗る乏しからざるなり。畢竟するに、此は是れ人の動物的方面と、社會の暗黒面のみを觀察したる僻論にして其正鵠を誤れるは固よりなりとす。

素より人に肉慾の満足を追する動物的性能あり。其行為生活、動もすれば其衝動に由て左右せらるゝは事實なり。左れど、同時に、人間の衷心に、眞善美を渴仰崇拜する潔き高き或もの存し、理想に憬がれ、正義を尊ぶ性情あることを否む可らず。社會に偽善、不徳、醜汚等、あらゆる罪惡行はれ、百鬼夜行の暗黒面



あることは疑ふ可らず。然れど、同時に、是等の惡風汚俗に反抗し、人間の動物的方面を抑制して、眞の人、即ち神子的性能を發揮せんと欲する要求あり。努力あり。黄金萬能の思想蔓れりと雖も、同時に、清廉高潔、誠實忠良なる人格を尊ぶの風漸く著しく、博愛慈善の思想、正義人道の觀念は、益個人と國民との間に勢力を加へ、着々として事實の上に現れ來ることをも又認めざる可らず。暗黒面にのみ着眼すれば、人生唯失望あり、自暴自棄あり、墮落あり、亡滅あるのみ。而かも吾人の動もすれば懷疑的悲觀に陥るは、罪惡の勢力強盛にして、正義人道の叫びを壓し、暗黒の影深くして、光明を蔽ふの觀あればなり。知らずキリストは遂に惡魔に勝つ能はざる乎。神子的生活、天國の實現も、遂に空想に歸すべき乎。何ぞ夫れ然らん。

由來、神子的生活と云ひ、天國の實現と云ふは、我等の現生活現社會と離れて別に存するものにあらず。神の子と云へばとて、起臥飲食を要せざる仙人となる

神中心の生活

の謂にあらず。天國實現と云へばとて、政治もなく、實業もなく、文學も美術もなき、新奇特別なる社會を作ることにあらず。神の子とは、唯生活の中心が、從來吾自身なりしものが、神自身となりたるものなり。萬般の志望、事業、昔は唯功名、自我の念に出たりしが、今は唯神の聖名の爲に凡ての事をなさんとするものなり。唯肉體の生命を保存せんが爲に、糊口の計に急なりし者、今は神の用務を務め得る、一個獨立の人たらん爲に生活し、自己の爲に富貴利達を圖りしもの、今は神の榮の爲め、人の利益の爲め、社界の幸福の爲に、拮据經營するに至る。官吏も、商賈も、労働者も、資本家も、文學者も、實業家も、教育家も、學生も、其日常生活の中心を神に置き、其凡ての言動をして、皆神意を成就し、其榮光を顯さんとの動機より發せしむ。收賄的官吏は、爲に清廉となり、不正なる商賈は正直となり、放逸なる労働者は忠實となり、強慾なる資本家は親切になるべし。文學者は、人生の慰安と向上の爲に、益筆硯を磨くべく、實業家は、富を以て社



會人類の進歩に貢献せん爲に、多々益々富を作るべし。教育家は、眞の人、即ち神の子を教育する爲に、其聖職を完うせんことを期すべく、學生は、其修むる處の學藝技能を以て、神子的生活を營まん爲に、勉強すべし。田園に、官署に、臺所に、事務室に、書齋に、工場に、屋外に、舍内に、山に、海に、到る處、執る業に、神と共に神の業を勵むものとなり、其勤務勞動、一として神聖高尚ならざるなく、一として愉快幸福ならざるはなし。此に神子的生活あり。此に天國の實現あり。

斯く觀じ來れば、神子的生活も、天國の實現も、決して現實生活と縁なき迂濶の空想にあらずして、個人の血肉となり、社會の生命となる一大事實なり。而して此理想は、個人より家庭に、家庭より社會國家に及ぼし、遅々たれども確實に、隱約冥々の裡に成長發展して、終に全人類、全世界に實現せらるゝ迄は息まざるべし。

夫れ道は人によりて活く。百の教訓は一の實例に若かず。倫理道德の教、燦然章を爲すものありと雖も、未だ深く人心の奥底に入り、其生活の全體を支配するの動機たり、規矩たること能はざるは、之に伴ふ人格の感化なく、隨て人心を指導する權威乏しきが故なり。教育勅語の、國民道德の標準として殆んど間然する處なきは、何人も異論なし。然れど、我國民の一生を通じて、其言行生活を支配する力ありや。教育家を始めとし、一般世人の生活状態を察するに、眞に能く「飲むにも、食ふにも、何事を爲にも」勅語の精神に悖らざらんことを期するもの幾干ありや。國家異常の日に於て、勅語の精神が、遺憾なく發揮せられたることば、我國民の誇りにして、外人の驚歎する所なり。此世界に類例なき武士軍人たる吾同胞は、平和無事の日に於て、否、通商其他、百般の事業に於て、大に對外的精神を以て競争奮闘せざる可らざる時に當り、果して勅語精神を銘記服膺し、眞面目に、忠實に、正直に、勤勉に、事に従ひ、業を執りつゝあるや。現今社會の實



狀に通ずる者、誰か能く然りと答ふるを得る乎。是れ實に、我國民道徳上の一大

範活ける模

キリスト教は、教理にあらずして事實なり。死せる道徳にあらずして、活る模範  
なり。キリストの教は、一として彼自身の實行的模範を伴はざるはなし。彼が謙  
遜を教ふるや、晩餐席上、自ら弟子の足を洗ひ、「我は汝等の師、又主なるに、尙  
汝等の足を洗ふ。汝等も亦互に足を濯ふべし。我汝等に例を示せり。此は我汝等  
に行し如く、汝等にも行はしめんためなり。」(約翰十三〇一―十五參照) 彼は當時の復  
讎的道徳に反して、愛敵の道徳を主張し給へり。是從來の道徳に卓絶せる特點に  
して、實に凡人の難んずる斯なり。然れども、彼は生涯を通じて之を實行し給へ  
り。其ピラトの廳に於て、兵卒の愚弄に身を委ねて敢て怒らず、其十字架にかゝ  
り給ふや、其敵人の爲に赦罪を祈り給へり。彼は「人其友の爲に生命を捐つるは、  
此より大なる愛はなし」と教へ給ひしが、彼自ら先づ十字架に死して、其範を垂

れ給へり。是に於てか、殆んど人間には難事と見ゆる彼の教訓も、凡て實行し得  
べきものなるを示し給へり。我等の前に與へられたる模範あり、残されたる足跡  
あり。之に由て彼を信する者は常に彼を仰ぎ、彼を望み、其範に倣ひ、其跡を履  
みて一生を送らんことを期す。彼の教の生命あり、活力あり、權威ある所以、亦  
實に此の活模範に存す。

其神子的生活、天國實現の理想の如きも、彼の生前に於ては、未だ能く實現せら  
れずして、却て畢生の事業、一敗地に塗れ、身は敵手に渡され、十字架に磔せら  
れ給へり。而かも彼は危機眼前に迫り、暗黒の影彼の前途を掩ひ、悪魔の勢力絶  
頂に達したる刹那に於て、「汝等世に在ては患難を受ん。左れど恐るゝ勿れ。我既  
に世に勝てり」(約翰十六〇三三) と宣し給へり。嘲ける者は、所謂曳れ者の小歌と  
や聞かん。信せざるものは、徒に大言壯語する者と思ふべし。然れど、彼は其の  
復活の力に由り、暗黒の彼方には光明あり、罪惡は正義に勝つ能はず、人類救済



天國建設の神意は、必ず成就實現せらるべし、否、既に彼自身、罪惡を征服し、惡魔に勝ち、之を實現し得たりと自覺し、確信し、全人類の爲に、凱歌を奏し給へり。是彼を信する者をして、彼の如き確信と希望を以て、其神子的生活、天國實現の爲め、飽迄も忍耐し、努力し、奮闘せしむる原動力なり。

「凡そ神に由て生るゝ者は世に勝つ。我等をして世に勝しむるものは、我等が信なり。誰か能く勝たん。イエスを神の子と信する者にあらずや」。(約翰第一書五〇四、五) 然り、罪惡の濁流滔々として世界に漲るとき、暗黒の影深くして四邊を罩むる時、猶且つ神の光明を望み、神意の實現を信じ、大敵を恐れざる勇士の戦線に立てるが如く、各自の持場に立つて奮戦健闘し、終に能く世に勝しむるは、此一たび死して甦れる神子イエスを信する信仰なり。キリスト教の大理想が空想にあらずして、既に着々として實現せられ、其勢力益熾んに、其範圍益廣きを加へ行くことは、驚くべき事實にして、而かも其根原、唯此信仰に存することは、殆んど

と神秘的とも云ふべきキリスト教の一大特色なり。

第十章 キリスト教と人倫

「汝等愛せらるゝ兒女の如く神に效ふべし。また愛を以て行ひ、キリストの我等を愛し、我等に代りて己を禮物となし、犠牲となして、神の前に馨香あらしめんとて献げ給ひしが如くすべし。聖徒たるに符ふ如く、奸淫及すべての汚穢たる事、また貪婪ことを、互に言ことだにする勿れ。淫辭と、浮言と、戲謔を言なかれ。是宜しからざる事なり、寧ろ謝することをすべし。蓋凡て奸淫する者、汚穢たる者、および貪婪者、即ち偶像を拜む者の、キリストと神との國を嗣を得ざることば、汝等知ばなり。汝等人の虚言に欺かるゝこと勿れ。神の怒り是等の事に因て、背逆者に至るなり。是故に彼等に與すること勿れ。汝等もと暗かりしが、今主に在て光れり。光の子輩の如く行ふべし。蓋光



の結ぶ所の果は、諸の仁こと、義こと、誠實の中にあればなり。主の悦ぶ所を辨へて之を行ふべし。汝等果を結ばざる暗行に與することなく、反て之を責べし。彼等が隠にて行ふ所の事は、之を云だにも醜べき事なり。凡て責を受くべき事は光に由て顯るゝなり。蓋すべてを顯す者は光なれば也。是故に云る言あり、寐たる者よ、目を醒し死より起よ。キリスト汝等を照さん。然ば汝等つゝしみて行を堅くすべし。智からざる者の如くせず、智者の如くし、機を窺ふべし。是時悪ければなり。是故に愚なる者と爲ることなく、主の旨は如何と識るべし。また酒に酔こと勿れ。之をなすは放蕩なり、宜しく靈に満さるべし。互に詩と歌と靈に感じて作れる賦とを以て語りあひ、又うたひて、汝等の心に主を讚美すべし。凡の事につきて、恒に我等の主イエスキリストの名に託て、神即ち父に謝すべし。キリストを畏るゝ心を以て互に服ふべし」。(以弗所五〇一二)

「汝等も各々其婦を己の身となして愛すべし。婦も亦其夫を敬ふべし」。(同章三三)

「子なる者よ、爾曹主に在て兩親にしたがふべし。是合宜なればなり。汝の父母を敬ふべし。約束を加へたる誠は之を首とす。是汝が福を得、また地上に壽長からんが爲なり。父なる者よ、汝等の子を怒らすこと勿れ。主の警誠と教訓を以て養育べし。僕なる者よ、キリストに服ふが如く、畏懼戰慄、まことの心を以て肉體に屬る主人に服ふべし。人を悦ばする者の如く、只眼前の事を務ること勿れ。キリストの僕の如く、心より神の旨を行ふべし。人に事ふるが如くせず、主に事ふるが如く、甘心つかふべし。そは僕なる者にもあれ、自主なる者にもあれ、各行ふ所の善に循て、主より報を受んことを汝等知ばなり。主人なる者よ、汝等も亦斯の如く彼等に行ひて、厲言を止よ。蓋彼等汝等の主、天にあり。彼は偏る所なしと汝等知ばなり」。(以弗所六〇一九)



キリスト教が、人倫の基礎を神人間の關係、即ち天倫の上に置くことは、既に絮説したるが如し。爰に摘録せる聖書の教訓を熟讀すれば、其所謂キリスト教人倫の一般を伺ふことを得ると同時に、其天倫と離すべからざる關係あることを了解すべし。由來我本心に對し、天地神明に對し、道德上の責任を感ずることは、武士道又は大和魂の思想中に含れざるにあらず。儒教に於ては、孔子が「天徳を我に生せり、桓離其子を如何」と云はれしは、彼の抱負自覺の凡ならざるを示すのみならず、亦彼が天を畏れ、天を敬するの人たりしことを推すべし。我邦の學者、宗教家中にも、父母君主の恩の外に、天地の恩を説き、或は神佛の宣示として人倫を説きたる者、尠からず。人心に善良有力なる感化を與ふるには、必ず以上の要素を缺くべからざることは、古今内外の事實の證明する所なり。儒教は、現實主義に傾き、「未だ生を知らず焉んぞ死を知ん」など、稍人間の心靈的要求を度外視したる觀ありと雖も、佛敎に至ては、佛の慈悲を説き、佛恩報謝

を勧め、あらゆる善事善根、唯佛の爲にすとの觀念著しく發達し、一見キリスト敎の天父本位主義と徑底なきが如し。左れど、動もすれば消極的となり、悲觀的となり、形式に陥り、空文に流れ、其所謂佛恩報謝なるものも、佛堂の建立、寄進、僧侶の供養等に止まり、或は單に彌陀を信じて、死後、極樂淨土に生る、を樂む如き、獨善主義に安んじ、また人の爲め、世のため、活躍奮闘する元氣精神を缺く如きは、由來、佛敎を信する個人と國民との陥り易き傾向にして、是迄の佛敎は、殆んど人世の活動と關係なき、出世間のものとなり、寺院は葬式供養を營む所、僧侶は其管理者たるに過ぎざる趣きありしが、近來文連の隆興に伴ひ、時勢の刺激に動かされ、佛敎も大に其面目を改め來り、傳道に、教育に、博愛慈善に、着々活動の實を示し、嘗て是等の事に關しては、殆んど獨占の姿ありしキリスト敎の壘を磨せんとするの概あるは、頗る慶すべき事なり。然れど、キリスト敎に比して、未だ以て一步を譲るを免れざるは、必しも僧侶信者の奮勵努力



に缺くる所あるが爲にあらずして、其根本の倫理思想に於て徑底あるが爲ならずとせんや。

キリスト教は神を本位となす。神の智能の無限絶對なることは、古今學者の驚歎措ざる所にして、殊に神を信する者の讚美を禁せざる所なり。然れど、キリストによりて啓示せられたる、神の倫理的性格の崇高神聖にして、純全圓滿なること、即ち、人類の理想し得べき眞善美の極致にして、而かも慈愛無量たる天の父たることは、實に是れキリスト教倫理の根本なり。其が單に人間によりて理想せられ希望せられ、推定せられて、一の教となりしにはあらずして、イエスキリストなる、我等の目見るべく、手觸るべき、史的人格に於て、顯彰されたる事實なることは、キリスト教が絶對的宗教として、永へに倫理的生命を失はず、益す進んで萬民の教化、天國の擴張の爲めに、常に活動を絶たざる所以なり。キリスト教は、神が人類を愛し、其救済の爲に獨子を遣し、吾等の罪の爲に犠牲

とし、斯て其切々の愛を我等に示し、我等に赦罪の恵と更生の能を與へ、我等をして、キリストに由て罪の子たりし舊き境遇より脱して、神の子の新らしき生涯に入しむる靈的實驗なり。眞に此靈的實驗を味へる者は、感激報効の念、常に胸中に湧き、其倫理的性格の養液となり、源泉となり、此神に効ひ、此神を喜ばせんとの一念より、凡ての善事を追求め、此神の子たるに耻ぢず、此天父の聖名を汚さじとの至情より、凡ての不潔、不義、罪惡に遠かり、「此の如く神我等を愛し給へば、汝等も互に相愛すべし」と、天父の愛の身に浸みて深くなりまさるにつけ、人を愛するの愛益切に、我一生の行動、飲食、起臥を始めとし、其事業勤勞、全く利己的動機を脱して、純乎たる犠牲献身、博愛仁慈の精神より發するに至る。此に至て、天倫人倫全く並行兩立し、些かの杆格齟齬なきのみならず、神を愛することは即ち人を愛することとなり、人を愛することは即ち神を愛することとなり、兩々相助け、相進んで、神人合一、父子一如の境涯に達するなり。



「人の子、おのれの榮光をもて諸の聖使を率ひ來る時は、その榮光の位に座し、萬國の民を其前に集め、羊を牧者の、綿羊と山羊とを別つが如く、彼等を分ち、綿羊をその右に、山羊をその左に置くべし。斯て、王の右に居る者に云ん。吾父に恵まる者よ、來りて、創世より以來、汝等の爲に備へられたる國を嗣。蓋汝等、我飢し時我に食せ、渴し時我に飲せ、旅せし時我を宿らせ、裸なりし時我に衣せ、病し時我をみまひ、獄にありし時我に就ればなり。是に於て、義者彼に答て云ん。主よ、何時汝の飢たるを見て食せ、また渴きたるに飲し、や。何時主の旅したるを見て宿らせ、又裸なるに衣しや。何時主の病また獄に在を見て爾に至りしや。王こたへて彼等に曰ん。我まことに汝等に告ん。既に汝等我此兄弟の最微者の一人に行へるは、即ち我に行しなり。遂にまた左に在る者に曰ん。罪せらるべき者よ。我を離れて、惡魔と其使者の爲に備たる熄ざる火に入よ。蓋汝等、我飢し時我に食せず、渴し時我に飲せず、旅

せし時我を宿らせず、裸なりし時我に衣せず、病また獄に在し時我を顧ざれば也。是に於て、彼等また答て云ん。主よ。何時汝の飢、また渴き、また旅し、また裸、また病、また獄に在を見て、主に事へざりしや。其時、王答て彼等にいはん。我まことに汝等に告ん。此最微者の一人に行はざるは、即ち我に行はざりし也。此等の者は窮りなき刑罰にいり、義者は窮りなき生命に入べし。」

(馬太二五〇三一—四六)

愛の奉仕

此一節を讀み、汝等此最微者の一人に行へるは、即ち我に行へるなり。其然らざりしは、我に對して行はざりしなりとのキリストの言に到らば、キリスト教人倫の根柢、全く神にあり、而して人類同胞に對する愛の奉仕は、即ち神に對する奉仕にして、二者決して別物にあらざることを見べし。

「主は、我等の爲に生を捐たまへり。是に由て、愛と云ことを知たり。我等また、兄弟の爲に生を捐べし。世の資財をもち、兄弟の窮乏を見て、反て惠施の



心を閉る者は、何で神を愛するの愛、その衷に存んや。小子よ、我等愛するに言と舌を以て相愛することなく、行と實とを以てすべし。是に由て、我等眞理より出しを知り、且我等心を主の前に安んずべし。我等が心、若し我等を責ば、神は我等が心よりも大なるにより、凡ての事を知給ざるなし。愛する者よ。我等が心みづから責ることなくば、神に向ひて憚る所なかるべし。且我等がすべて求むる所は彼より受、そは其誠を守りて、其悦び給ふ所を行へばなり。此誠は、即ち我等神の子イエスキリストの名を信じ、彼の我等に命せし如く互に相愛すること也。神の誠を守る者は神にをり、神も亦彼に居、我等其賜ふ所の靈に由て、即ち其我等に居給ふことを知れり。」(約翰第一書三〇十六—二四)

「我等神を愛するは、神先づ我等を愛するに因り。若し我は神を愛すと云て、其兄弟を憎む者は是謊者なり。既に見どころの兄弟を愛せずして、未だ見ざる神を何で愛せんや。神を愛する者は、亦其兄弟をも愛すべし。此誠は、我

等彼より授けられたり。」(約翰第一書四〇一九—二二)

以上の聖句を翫味せば、愛神愛人は兩翼の如く、双輪の如く、離す可らざる、關係あることを了すべし。若し我等神の愛に感激し、其聖旨の程を推し測り、之に答へ、之を悦ばせ奉らんとの愛神の心なくば、愛人の情は容易に起らず。同時に、人を愛すること切ならずば、神を悦ばせ奉ること難し。蓋人を愛すること其聖旨なればなり。故にキリスト信者の眞偽價値は、一に其愛の有無深淺によりて定まるなり。凡ての人格の價値を判する亦此標準に依るべきなり。

「是故に、汝等神に選れて、聖潔且愛せらるる者となりたれば、慈悲、矜恤、謙遜、柔和、忍耐を衣よ。汝等互に容忍をなし、若人に責べき事あらば、之を恕せ。キリスト汝等を恕し給へる如く、汝等も然すべし。この諸の事の外に愛を加へよ。愛は衆徳の帯なり。」(哥羅西三〇十一—十四)

キリスト教倫理の根本は愛なり。人は先づ一個の人として神の前に立ち、内心に

愛は心の生命の徳の帯



大なる孝道

此愛の涵養を勉めざる可らず。此涵養は、既に絮説したるが如く、愛其自身なる神と、其活現なるキリストを信じ、之に結び、之に連りて、其養液を受け、其永久不盡の源泉に汲みて、動もすれば涸れ易き我心腸に、愛の泉を湛ふることなり。人既に此愛を體得す、他の諸徳の花實は期せずして發生すべし。それ孝は萬善の本なりと、未だ孝にして忠ならざるはなく、未だ孝にして悌ならざるはなし。其他、夫婦朋友等の關係に於て、皆宜しきに合はざるはなし。キリスト教は、神に對する愛、即ち天父に對する孝道を根本とす。其不完全なる人の親を對象とするに比して、其道德の基礎固く、其倫理の根柢深きことは言を俟たざるなり。故に、眞に天父を愛する孝子たらば、即ちキリストの心を以て心とする者ならば吾肉親の父母を愛すること世の所謂孝子に劣るべき筈なし。「汝の父と母を敬へ」とは、神の大命たればなり。(キリストは十字架の上より、其愛せし弟子を呼び、其母マリヤの奉養を托し給へり。)又國家及び主權者に對して、當然の服従と尊敬

を拂ひ、其忠良の臣民たること決して人後に落つべき筈なし。

「上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべし。蓋神より出ざる權なく、凡そ有ところの權は、神の立たまふ所なればなり。是故に、權に悖ふ者は神の定めに逆くなり。逆者は自ら其審判を受くべし。有司は善行の畏に非ず悪行の畏なり。汝權を畏れざることを欲ふ乎、たゞ善を行へ。然ば彼より褒を得ん。彼は汝に益せん爲の神の僕なり。若し惡を爲ば畏れよ。彼は徒らに刃を操す。神の僕たれば、惡を行ふ者に怒りをもて報ゆる者なり。故に之に服へ。惟怒に縁てのみ服はず、良心に縁て服ふべし。是故に汝等貢を納よ。彼等は神の用人にして、常に此職を司ぐれり。汝等受べき所の人には之に與へよ。貢を受べき者には之に貢し、税を受べき者には之に税し、畏るべき者には畏れ、敬ふべき者は之を敬べ。なんぢら互に愛を負の外、凡ての事を人に負こと勿れ。蓋人を愛する者は律法を完全すればなり。」(羅馬書十三〇一八)



天父に對する一片の孝心を有する者は、能く忠に、能く孝に、兄弟姉妹、相親み、夫婦上下相愛し、朋友相信し、郷黨相和す。其他往く所として可ならざるなく、現るものとして徳に合はざるなし。故に若しキリスト信者と稱へて、是等の諸徳を具へざる者は、未だ天父の孝子なりと謂ふを得ず。「兄弟よ、終に我之を言ん。凡そ眞實なること、凡そ敬ふべき事、およそ義きこと、凡そ清潔こと、凡そ愛すべき事、およそ善稱ある事、すべて何なる徳、いかなる譽にても、汝等これを念ふべし」(腓立比四〇八)と。然り、「學者とパリサイの人の義しきよりも、汝等の義こと勝れずば、天國に入ること能はず」とのキリストの言、敢て以て我等信者と稱する者の規箴とすべし。眞のキリスト信者は、世の所謂忠臣、孝子、烈女、貞婦、義僕に比して、優ることも劣る可らず。其精神と行爲とに於て、常に一頭地を抜き衆人の模範となり、指導者たることを期し、以て「汝等は世の光りなり、地の鹽なり」との、キリストの宣命に答へざる可らず。世間往々、キリスト教の吾國忠

孝の教に悖るを云ひ、其例證を擧げ來ることあり。若しそれ事實の正鵠を得たるものありとせば、斯る人々は顧みて深く耻する所あらざる可らず。而して、其キリスト信者の名ありて實なき我が言動の爲め、累を人と神とに及ぼしたるを懺悔し翻然改悛の實を示さざる可らず。若し然らずんば、彼は到底神と人とに捨らるゝの外なきに至るべし。

我邦從來の  
欲點の

然れども、爰に指摘すべき重大の事實あり。其は從來我國の道徳は専ら服從的にして、臣の君に對し、子の親に對し、妻の夫に、主人の僕に對する道を規定するに遺憾なしと雖も、君の臣に、親の子に、夫の妻に、主人の僕に對する道に關しては多く言ふ所なし。上長者に對しては絶對的服從を強ひ、少しにても逆ふ者は直ちに不忠不孝を以て目すれども、其君父の不仁不慈に關しては深く答むる所なく、上長者は其下に對し、殆んど絶對の權威を保障せらる。此故に、君は民を虐ぐれども、民訴ふる所なく、親は子を苦しむれども、子は争ふに由なく、夫



は妻を虐待し、主人は僕を酷使するも、辯疏するに能はず。所謂御無理御尤なる事實は處々に見出され、此に姑息の平和は維持せられ、能く其不法非理に耐へ、虐待酷遇を忍ぶ者は、往々にして、忠臣、孝子、貞婦、義僕の名を博するなり。然れど、下の上に對する道あるが如く、上の下に臨むの道自ら存せざる可らず。古來此道に則りて行ひし明君良主尠からず、之を遵奉する慈親賢夫今猶多し。雖も、因襲の久しき、動もすれば、上長者の不法壓制を一種の特權と心得、卑屬者の服従を義務なり、美德なりと強ふるの風あり。それ家に争ふ子あれば、其家亡びず、國に諫むる臣あれば、其國亡びずと云へり。假令上長者の命令たりども、其が明かに不義不正にして、之を實行することは、結局其耻辱となり、禍害となる如きあらば、眞に忠孝の心を存する者、如何でか諫争せざらんや。常に從ふは孝に非ずとの言の如きも、聊か此間の消息と相通じ、非理不法に對する辯疏諫争を是認し、非常の場合には、大に依りて進退することを説かざるに非ざ

れども、而かも三たび諫めて聽かれずば身退くと云ひ、或は涙を呑んで終に其不法の命令に殉すと云ふ如き、結局上長者の匪行を助くるに終ること多し。是れ果して忠孝の眞義なりや。斯る匪行の犠牲となりし者、古來尠からず。暴君を諫めて手討に遇ひたる忠臣の如き、或は子の親を諫めて刃に伏し、或は妻の死を以て夫を諫めたる如き、歴史に傳はり、人口に膾炙せる事例は云ふに及ばず、上流社會の家庭より、市井巷閭の間に至る迄、此偏頗なる道德の爲に苦しめる者は擧て數ふ可らず、是實に我國從來の道德の一大缺點なり。キリスト教は之に反し、下の上に、上の下に對する道德を規定するに於て遺漏なく、亦偏頗なし。前掲聖書の數節は其一般を示すに足るべし。凡ての主權者は、神より選ばれて民を治むることを托せられたるものなれば、常に神意の存する所を畏み、正義仁慈を旨として下に臨むべしと云ふ。是れユダヤ人の王たりしものより、現代歐米各國の主權者の抱く所の信念にして、又其服膺する所の大道な



り。此の他、親は神の愛と正しきに從ひて子を教へ、夫は道理に循ひて妻を愛し、主人も神意を畏みて僕を憐む如く、上下長幼、交も相愛して互に悖ることなきを期す。さればヴィクトリヤ女皇、嘗て治國富強の要訣を問ひたるものに對し、一卷の聖書を舉示し給へりと云ふ人口に噲炙せる美談あり。最近英國皇后の、可憐なる患者の一少女の請に從ひ、直に其病院に彼を慰問し給へる如き、上下和合の好適例なり。其他基督信者たる主権者にして、博愛仁慈を以て聞ゆる者、古今其例に乏しからず、主権者にして常に此徳を具へ、此道に則つて下に臨む、民衆の悦服愛敬は言を待たざるなり。歐米の國歌なるものを見れば、其主権者に對して神の保護を祈る熱烈の情緒を示せるもの多し。君民共に愛神愛人の大道に從ふ。上下相和し、君民相親み、天下茲に平かなり。父子夫婦、其他の關係に於ても、此信仰と主義とを共にすることに因りて、家庭は永へに平和悦樂の祝福を味ふべく、社會は安寧幸福の恩澤に浴することを得べし。即ち此世からの天國を實現す

天國に則  
給ふ我  
皇室

るを得べし。キリスト教の所期實に此に在り。神靈の活動も、信者の努力も、畢竟此天國を實現せんとするに外ならざるなり。我皇室の人民に於る、古來仁慈を旨とし給ひ、其安否休戚を以て念とし給ふこと慈親の子に對するが如きあり。其治民の要旨は、常に徳に基き、道に合はんことを期し給ふ。此故に、臣民の歸敬悦服限りなく、殆んど宗教的熱情を以て皇室を尊崇すること、他國の比に非らず。此皇室の美德と下民の良風とは、相俟て我國體の精華となり。萬世一系の皇統、連綿として窮極なく、國民亦長へに其慶福を仰がんとす。維新以來、煥發せられたる勅語を拜讀するに、天地神明の照鑑を信じ、皇祖皇宗の遺訓を奉體し、或は天佑を保有して皇祚を踐み給ふと云ふが如き思想と辭句とは、屢其中に見出さる。其天地神明と云ひ、天佑と云ひ、或は皇祖皇宗の遺靈と云ふが如き、未だ必ずしも宇宙萬有の主宰たる眞の神の觀念と均しからざるものありとするも、其正理公道を重んじ、徳を以て治國の要道となし給



ふに至つては、自からにして、天意に則り給ふものと謂ふべきなり。  
 今や憲法の規定により、政治上の責任は、一に補弼の臣に存すと雖も、正理公道を以て政を行ひ、博愛仁慈を以て治民の要旨となし給ふことは淪るべくもあらず。然らば補弼の責に任ずる者は勿論、官民上下皆此聖旨を奉戴して、苟も相悖らざらんことを期すべきは勿論なり。憲法に於て、臣民に信教の自由を許與されたる如き、明かに此聖旨に基くものと謂ふべし。然れば國家の秩序安寧を妨げず、臣民たるの義務に背かざる限り、如何なる宗教を信ずるも亦妨げなし。況んや正理公道の本體にして、愛神愛人の大道たるキリスト教を信ずるに於てをや。然るに、世間頑迷の人尠からず。キリスト教の真相如何を究めずして、基督教を以て漫然忠君愛國の教に悖り、國家に危害を及すものなりなど唱へ、或は外教を信ずるは、祖先に對して相濟ますなど稱し、内々キリスト教を信ずる者を迫害し其信仰の自由に干渉し忠孝の名によりて其信仰を捨てしめんと試むるものあり。

所謂基督國書論

曩には官府の間に、家庭の中に、軍隊に、學校に、此種の人多かりしが、今も全く跡を絶たざるが如し。此に已を得ざる衝突あるは、餘儀なき成り行と謂はざるべからず。此衝突を目して、直に國家社會の平和を紊るものなりと斷じ、此餘儀なき成り行を以て即ち忠孝の大義に背くものなりと誣ひ、自己より故らに此已むなき結果を招致しながら、之を以てキリスト教に嫁し、一層其の僻見を固持し、主張するに至るは歎すべき也。由來、キリスト教徒の受けたる非難の多くは、此種の事情に原因せるものなり。  
 眞のキリスト信者とは、前述の如く、愛神愛人の至誠を以て世に處する者なれば國家に對しては忠良なる臣民となり、親に對しては從順なる孝子となり、友としては信すべく、夫としては敬すべく、妻としては頼むべく、主人として服すべく、僕としては愛すべきものなり。彼等は好んで衝突せず、故らに論争することなし。蓋し平和は其最も愛重するものなればなり。故に、頑迷固陋の僻見より、敢



て其信仰に干渉することなく、或は故らに其主義に反する不法不義の言動を強ふることになくば、亦何等の衝突波瀾を惹起す憂ひなきのみならず、我國忠孝の教も、始めて此に根幹を得、基礎を見出し、永久に我國民を支配することを得べし。

今や、文運進歩し、時勢推移し、キリスト教に關する誤解も漸次取除かれ、キリスト信者は正直なる者、頼母しき者、眞面目なる者、品行方正なる者として社會の歡迎を受くるに至れり。其軍人として、官吏として、代議士として、教育家として、實業家として、其他工場に、商店に、會社に、銀行に、至る所に、多少の異彩を放ち、特色を發揮し、中には其感化勢力の認むべき、人の尊敬を受くる人格高き者も亦尠からず、斯る時代に在りて、猶キリスト教國害論を唱ふる如きは、所謂時代後れの甚しきものと謂はざるべからず。所謂キリスト教國害論の根據なきことは以上論じたるが如し。されど尙一の誤解

あり。曰く、キリスト教は、君の上に更に君を戴くが故に、我邦に於て、至上の權威と光榮を有する者として尊敬せられし、皇室の威嚴を薄弱ならしめ、又父の外に更に父ありとするが故に、所謂親の威光を損し、從來熱烈なりし忠孝の至情を減少冷却せしむる虞れありと。一見頗る道理あるに似たりと雖も、是畢竟キリスト教の神を以て、所謂君父に對抗する相對的の者となし、恰も同時に二君に事へ、二父に見ゆるの感を抱くが故なり。然れど、神は自然の科學的法則が王侯臣子の別なく、貧富貴賤を論せず、一視同仁に支配する如く、人類と云はず、禽獸と云はず、宇宙萬有を主宰統治し給ふ絶對的存在者なり。人類も、萬物も、彼に由りて生命を保持するを得るなり。然れば、國籍と身分を問はず、全人類は畢竟其心靈的治下の民にして、又其慈愛の手に育まる、子女たるなり。若し神にして其奉仕供養を要すること、恰も人の如き者ならんには、人は到底同時に二人の主事に事ふること能はず。其注意を二三にし、其能力を別ち、自然親疎輕重の差を生



じ、論者の杞憂或は事實となることあらんも、神は眞善美の極致にして、完全なる靈的實在者なれば、人の之に事ふる唯靈と眞とを以てするのみ。愛神は愛人なり、神の喜び給ふ所は、人が神の子たるに相應しき徳性を具へ、神意を奉體實現せんととなり、神に事ふる心を以て君に事へ、天父を愛する心を以て肉親の親を愛し其他、夫婦、主従、上下長幼の關係に於て、皆此愛神愛人の至誠を以て行ふべきなり。亦何ぞ忠孝の至情を滅殺するものあらんや。否、却て之を涵養し、助長するものなることは上來既に復説したる所によりて明かなり。今や、物質的文明の餘弊として、何よりも金錢を重しとする黄金崇拜主義は、漸く國民の心に浸染し利の爲には、父子兄弟、法庭に争ふを辭せず、金錢の爲には、多年の友誼を毀つを厭はず、人皆我利を圖り、私慾を充すを以て念と爲す。彼等の日常生活、果して忠孝の大義に支配され居るや否や。其言行に、事業に、果して君父の爲にすとの至誠存するや、否や。キリスト教國害論者の憂ふべきは、決して愛神愛人を

黄金崇拜の病毒

説き、犠牲献身を主張する、キリスト教の傳播にあらずして、此黄金崇拜主義の蔓延なり。肉慾主義、利己主義の跋扈なり。物質的思潮の横流なり。是等こそ、眞に國家に危害を及ぼす毒素なれ。而して是等の毒素を排除し、國家をして益隆興せしむるは、實にキリスト教の弘道傳播に依るの外なし。

世の忠君愛國を稱へ、キリスト教を以て之と相反すとなす人々は更なり、是等の問題に對して、冷淡無頓着なる人々も、願くは共に來りてキリスト教を研究せよ、其天倫人倫の密接なる關係を學べ。而して身自ら道徳の源泉に汲み、倫理の根柢に結合せよ。斯くて眞の人として、神の子として、生活するに至らば、忠孝の道自ら全うせらるゝのみならず、其他の諸徳、期せずして備はり、人格の内容、一層、豊富高大となり、其言行に、事業に、人を利し、世を益し、以て人たるの本分を盡し、人生の意義を完ふするを得べし。常住の平和は、茲に於て乎在り。不盡の悦樂は茲に於て乎生ずべし。斯くて、家庭より社會國家に及ぼし行かば、天



國の實現亦決して難事にあらざるを見るべきなり。

第十一章 信仰の意義

「それ信仰とは、望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑據とするものなり。」(希伯  
來十一〇一)

認めて信  
ぜず

信仰とは、單に事物の真相と價值を承認するの謂にあらず。承認するは智識の働  
にて、其は眞實なり、道理なりと首肯せしむるに止まり、必ずしも其以上に、其  
人の全身全靈を動かすべき、何等の感激も、實行も、喚起せず。勿論信するには  
先づ認めざる可らず。人は其眞なるを認めずしては何ものをも信する能はず。隨  
て其信せざるは、未だ能く認めざるが爲なりと謂ひ得べきも、實際は、認めて而  
かも信せざる場合多し。ユダヤ人もキリストを、預言者なりと認めたり。然れど、  
之を信せざりき。後の學者、反對者も、キリスト教を以て善良と認め、或はキリ

信仰とは  
何ぞ

ストを以て、宗教的大天才なりと認めたり。然れど彼等は之を信するに至らざり  
き。現今我邦に於ても、亦然り。少しく天下の事情に通ずる者は、何人もキリス  
ト教を以て悪しと謂ふ者なし。彼等は之を信する者に遇へば、至極結構なりと贊  
成し、或は自家の婦女老人等には、之を信せしめんことを願ふ者すら尠からず。  
彼等はキリスト教の善き感化力を認むるに於て、人後に落ちず、其教徒の經營に  
なる慈善博愛の事業の如きに對しては、常に同情者たり、賛助者たるを辭せず、  
而かも彼等終に自ら信せざるなり。世の所謂キリスト教賛成家なるもの、徒らに  
門外に彷徨して入らず、終に救ひの堂奥を窺ふ能はずして終るは、眞に靈界の恨  
事と謂べきなり。

信仰とは、智識にて其眞實なるを認むると共に、感激の熱情と實行の意思を喚起  
し、所謂智情意の全人を以て之を信することなり。即ちキリストを信するとは、  
彼の天父の獨子にして、人類救済の爲に世に降り、終に天父の意思に従ひて我等



人類の爲に贖罪の死を遂げたることを眞實なりと認め、其愛に感激し、翻然昨非を改めて新人となり、彼の一切の命令、教訓に至上の權威を認め、之を實行服膺せんことを期し、彼の一生の行爲は、吾が爲めの活ける模範なりと信じ、吾一生を通じて、彼の足跡を踏んど決心することなり。別言すれば、疑ふ所なく、惑ふ所なく、絶対の信頼服従を以てキリストの許に來り、其救済の靈能に與かり、其愛の手に我全靈全身を獻げ、其聖旨に任することなり。此信仰あり、救済の靈能は、此に人心内に活動を生じ、終に至き更生を實驗せしめ、其新決心、新理想をして、着々として其人の性格に、日常生活に、實現せしめ、終に長子たるキリストの至き肖像に似る迄に至らしむ。此に人類の光榮あり、平和あり、喜樂あり。神人相親み、同胞相愛し、天國は實に吾等の中に来るなり。

「イエス其弟子に云けるは、若し我に従はんと欲ふ者は、己を棄て、其十字架を負て我に従へ」(馬太十六〇二四)

十字架を負ひて従ふ。是キリストの徒たるに必要なる條件なり。其十字架とは、一面に於ては、舊き我と其罪とを悉く十字架に釘て殺し今より後全く新人たらんとの志と、他面に於ては、人の爲に自己を犠牲にするを意味するなり。世には、禁酒禁煙の實行出來ずとて、キリスト教に來ることを躊躇する人あり。又信者と唱ふる人の中にも、喫烟飲酒は毫も神子の新生涯には關係なきものなりとて公然此明白なる悪習慣を續け、或は人を憚り、我獨りあるときのみ、密かに飲用する人あり。共にキリストの精神に遠しと謂ふべし。「夫れキリストに屬する者は肉と其情及び慾とを十字架に釘たり。それ我等、靈に由て生なば、亦靈に由て行むべし」。(加拉太五、〇二四、二五)キリストを信する者は罪を捨てざる可らず。凡ての如何はしき悪僻陋習を絶たざるべからず。利己的、肉慾的、物質的の生活を捨て献身的、靈的の生活を營まざるべからず。是れ罪の中に生活せる人間に取りては頗る難事にして、其要求の餘りに高大に、其倫理の餘りに嚴正なるが爲めに、辟



易遂巡し、其十字架を負ふの苦痛を厭うて、終に救に入ることを得ざるもの多し。即ち彼等は其十字架に礙くものなり。左れど、世に稀なる寶を得ん爲には、高き價を拂はざる可らず。況してや、心靈の全き救ひに與かり、一たび失はれし神の子の地位を回復し、永遠の生命を得る爲には、亦大なる克己犠牲の代價を要すること當然ならずや。キリストは、此救済の爲に、十字架に犠牲の死を遂げ給へり。然らば、キリストの徒たらん者、亦其十字架を負ふの覺悟の肝要なることを言を俟たず。一たび此覺悟を以て、決然として起つて従へば、茲に救済の靈能は活動を始め、禁酒禁烟の如きは云ふに及ばず、自家の努力のみにては到底實行困難なりと思はれし事も、意外に安々と行はれ、其重きに堪へまじと恐れし十字架さへ、キリストに支へられ、助けられ、勵まされて、喜んで負ひ行くことを得るに至る。是れ人の信仰と神の靈能との、不思議なる交感作用に因るものにて、幾千萬の信者の實驗によりて保證せられたる、キリスト教の特色の一なり。

決然起つて従へ

第十二章 撰擇の自由

「神の遣し者は神の言を語る。蓋神是に靈を賜ひて限量なければなり。父は子を愛して、萬物を其手に授けたり。子を信する者は窮りなき、生命を得、子に従はざる者は生命を見ることが得じ。且神の怒り其上に留らん」。(約翰三〇三四—

三六)

キリスト人の疾病を癒し給ふや、多くは其熱切にして疑はざる信仰を見て「汝の信仰汝を救へり。安然にして往け」或は「汝が信する如く、汝に成るべし」と告ぐるを例とし給へり。而して、彼の言の如く、あらゆる疾病は悉く癒されたり。其弟子、嘗て鬼につかれたる者を癒さんことを求められて能はず、遂にキリストを煩はせり。キリストは言下に鬼を追出し給へり。其弟子密かに來りて、彼等の能はざりし理由を問ひたるに、イエス答て曰く「汝等信なきが故なり。我まこと

キリスト信仰を要求す



に汝等に告ん。若し芥種の如き信あらば、此山に彼處に移れと云ふも必ず移らん。亦なんちらし能はざる所なかるべし。〔馬太十七〇一四—二一参照〕 疑ふ者神の靈能を受くる能はず。唯一片確固不拔の信念あらば、驚天動地の大業も亦遂げ難きにあらず。況んや疾病治療の如きをや。彼等が信することなきに由て、多くの異なる能を茲に行給はざりき。〔馬太—十三〇五十八〕と。是れキリストが、之れを行ふ能力を缺き給ひしが故にあらず。彼を信せざる者は自ら其頑迷の心に任せて彼を疑ひ彼を嘲り、假令キリストに於て治療を與へんとの意思あるも、彼等は來りて之を受くるを拒みたればなり。實に信仰は、神の靈能を受くるに必要なる唯一條件にして、亦靈界の秘奥をひらく無二の關鍵なり。

夫れ太陽の光明は六合を遍照す。山に、野に、河に、海に、都に、里に、金殿玉樓と茅舍陋屋とを問はず、貧富貴賤と男女老幼の別なく、遮るものだになくば、如何なる場所にも、如何なる人にも、其慈光を被らせ、其恩澤を頌つべし。此光

を仰ぎ、此和煦を受けて、人類も、萬物も、生々の氣を保つを得べし。然れど、人若し故らに之を遮り、自ら戸を閉て之を拒まば、光は遂に入來らざるなり。太陽の光を受けざる草木の、生氣なく、遂に凋衰枯死を免れざる如く、全く光明を仰がずして、常に暗黒の中に在る人は、終に疾を發して死するに至るべし。

イエス人々に語りて曰けるは、「我は世の光なり。我に従ふ者は暗中を行かず。生の光を得るなり。〔約翰八〇十二〕 物質界に於て、太陽の光の大切なる如く、心靈界に於る此光は、更に缺く可らざるものなり。此光を受けざる人は、幽暗陰濕の地に草木の生長せざる如く、其心靈は遂に凋衰枯死の外なきなり。光なき世界の、如何に冷やかに、寂しく、幽鬱なるべきや、之を想像するだに堪へざる心地す。此中に在りて、終に死滅を免れざる人と物との運命の、如何に悲惨なるや知る可き也。然れど、靈能の光を仰がざる人の心靈の悲惨は、更に之よりも甚しきものあり。光明なき處には希望なし。希望なき處には向上なし、奮闘なし。向上奮



闘なき處には生命なし。生命なき處には平和なし、喜悅なし。其果は永遠の死滅なり。

心の戸を閉づる者

世人能く日光の貴重にして、人間の生活に缺く可らざるものなるを知る。愚人狂者にあらざる限り、故らに戸を閉ちて光を容れず、常に黒暗々の裡に起臥して、自ら死滅を招くものあらんや。而かも彼等は、我心靈を照す光の更に大切なるを知らず、恬として、自家頭上の問題にあらざるが如き感を抱き、或は故らに心の戸を閉ちて之を拒むもの、滔々として然らざるなし。其冷淡なるは、永く暗中に在りて、燈火に依て生活し、太陽の存在を知らず、隨て其必要を感じざる人に化すべし。知りて之を拒む者は、豈其必要なき爲ならんや。眼疾ある者の、光線を眩ゆく感ずる如く、又悪事を行ふ者の常に夜を選ぶが如く、彼等の性行に疾しきものありて、其光明に照さるゝを恐るゝ爲ならずや。神の其子を遣し給へるは、世を審判かん爲にあらす、彼に由て世を救んが爲なり。彼を信する者は審れず、

信せざる者は既に審れたり。蓋神の生給へる獨子の名を信せざるによる。罪の定まる所以は、光世に臨りしに、人其行の惡に因りて光を愛せず、反て暗きを愛すればなり。凡て惡を爲す者は光を惡み、其行の顯れざらん爲に、光明に來らず。眞理を行ふ者は、其行の顯れん爲に光に就る。蓋神に遵て行へばなり。〔約翰三〇七—二二〕是れ實に人心の狀態を道破せるものにあらずや。

小さき燈光に満足し、安心し、暗中に居て暗を感じず、光明遍照する晝の世界を知らずして亡ぶる者も、知りて故らに之を拒み自ら敗亡を招くものも、如何に悲惨にして、同情すべきものなるか、光は到る所に照さんと欲して、聊かの間隙を求めて入らんとす。光は普遍なり、公平なり、而も熱切なり。何人にも、其慈光を與へて照し、暖ため、生さんとするなり。而も之を拒んで受けざる者は、其爲すが儘に放置せられざるを得ず。是實に人類に自由意思を興へられ、善惡共、其責任を負ふべきものと定められたるが故なり。受けて救はるゝも自由なり。拒ん



で亡ぶも亦自由なり。此明暗禍福の分る、岐路に立ちて、人は果して何れを取らんとするや。

「視よ我戸の外に立て叩く。若し我聲を聞て戸を開く者あらば、我その人の所に就らん。而して我は其人と共に、其人は我と偕に食せん」。(約黙三〇二〇) 然り、キリストは凡ての人の心を叩き給ふ。彼の聲を聞きて戸を開かば、光にして生命なるキリストは入給はん。而して其心を照し、暖め、生し、救ひて、神と共に生くるの幸福を與ふることは、天父とキリストの切々たる愛の聖旨なり。而も頑迷執拗にして、敢て其戸を開かずんば、彼の遺憾不本意は言ひ難き者ありと雖も、彼は其儘に棄置き給ふの外あらず。慈母あり。放逸無頼にして、己を捨て去れる其子の不孝を悲み、其行末を思ふて、煩悶の極終に病を發して死す。而も最後迄、其念頭を離さざりしは其子にして、其口に絶たざりしものは其子の名なり。彼は子の爲に愛の犠牲となれるなり。假令其心鬼の如き者なりとも、一點の良心猶存す

切々の愛

るあらば、如何にか痛恨懺悔、翻然改悛して歸らざることあらんや。若し人の之を告ぐるあるも信せず、又愛情に充ちたる血涙の遺書を見るも、猶信せず、慈母空く死して、蕩兒終に歸らざる如きあらば、人世の恨事之に過ぎたるはあらず。之を以て神意を推すは聊か倫を失すべきも、信せずして亡ぶる者に對する神の聖慮の、更に之よりも深刻に、痛切なるものあるは蓋し信するに難からざるなり。天父の愛は、キリストの十字架の血によりて、吾等に證せられたり。爾來世々彼を信じて救はれし者、或は殉教の血を以て、或は涙の祈りと愛の努力とを以て、之を宣傳し、證明し居るなり。人類救済の一部始終は、キリストを始め、彼を奉ずる者の血涙にて書かれあるなり。我邦に於て、古來、血書血判なるものあり。其誓約の偽りなきを證する爲に、我血を用ふるなり。是れ血は、其人の精神と生命とを代表するものなればなり。武士的精神あるものは、互に之を信じて疑ふことなかりき。知らず、現代の人、斯く多數無量の血涙を以て證せられたる事實に



接し、果して能く信すべきや、將た疑ふべきや。「信せよ。然らば救ふことを得ん」。撰擇の自由と責任とは、一に吾に在り。嗚呼、我讀者は如何に其自由を用ひんとするや。

第十三章 結 論

「我言し處、亦宣べし所は、人の智慧の婉言を用ひす、惟靈と能の證しを用ひたり。蓋汝等の信仰をして、人の智慧に由らず、神の能に由らしめんと欲へばなり」。(哥前二、〇四、五)

是れキリストの大使徒パウロが、哥林多人に送れる書翰中に宣明せる所にして、彼は主キリストと其十字架の外は、何をも知るまじと決心せりと言へり。本書述べ來りし所、亦何等の哲學的辯論なく、科學的證明なく、唯聖書の所説を基礎とし、眞に信じて救はれし者の實驗を以て、之を證せんことを企てたり。是れ論よ

著者の眞  
願なる祈

り證據、眼前拒否すべからざる事實を提げて、讀む人の注意を喚起し、彼が自ら進んで其眞相を探究し、遂に救済の靈能を信じて救はれんこと、著者の眞摯なる祈願なればなり。

「我等の勸は、惑より出るにあらず。汚れより出るにあらず。亦詐りを以てせず。我等神の選びを得、福音を傳ふことを託ねられたるに因て語るなり。此は人を悦ばするにあらず、我心を察し給ふ神を喜ばするなり」。(テサロニケ前二〇

三)  
「萬の人救を受け、眞理を曉るに至るは、神の望み給ふ所なり」。(提摩太前二〇

四)  
「我汝等に告ん。一人の罪あるもの悔改めなば、神の使の前に喜びあるべし」。

(路加十五章全體参照)

完全なる親心を持ち給ふ神は、神を忘れ、神を離れ、我から父の家を捨て去りし



蕩兒に似たる人類を救ん爲め、此に救済の道を開き給へり。然れば萬國萬民の救はれて、歸り順ふを喜び給ふ如く、亦最微き一人の悔改めて、歸り來ることを悦び給ふなり。嗚呼、是れ實に切々たる神の聖旨なり。パウロは「我福音を宣傳へずば實に禍なり」(哥前九〇十六)と言へり。彼は父なる神とキリストの愛に勵まされ、已まんと欲して已む能はざる、至誠と熱情を以て福音を宣傳へたり。管にパウロのみならず、眞に救済の靈能を實驗せしものは、何人か、神の聖旨の在る所を畏み、自己の救ひに對する感恩報謝の熱情と、未だ救はれざる靈魂に對する深き同情を以て、此救済の福音を宣傳へざらんや。キリスト教は此の如くして、個人より家庭に、家庭より社會に、親戚朋友より郷黨隣里に及ぼし、靈化の波紋留まる所を知らず。遂に世界萬國に擴まるに至れり。神は斯くて凡ての人に其聖旨を傳へ、其心の戸を叩き給ふなり。

世人、往々信教の勤めを受けて、求道の念なきにあらざれども、時間なし、餘暇

傳道の至

なしと稱す。學生は學課に忙しきを語り、教育家、官公吏は、皆勤務の繁きを云ひ、實業家も、労働者も、主人も、妻君も、何人も、各自の業務に寸暇なしと云ひ或は此事を成し或は彼事を了へて、閑を得るに至らば研究すべしと云ふ。是れ實に宗教に對する侮辱なり、否寧ろ彼等自身の不明を表示するものなり。心靈救済の、人生緊急の第一問題たることは、以上縷述したるが如し。此問題の解決如何によりて、人生の意義と價值とは定められ、之を信ずると否とに由りて、永遠の禍福は決するなり。意義あり、價值あり、多幸有益なる生涯を送らんと思ふものは、必ず先づ此問題を決せざる可らず。

如何に繁忙なる業務に従ふ者と雖も、一日に數時間は自己の時間あり。一月一年に、數日若くは數十日の休暇を有せざるものは稀なるべし。彼等は自家の娛樂の爲ならば、此等の貴重なる時間を用ひ、尙金錢を費すことすら吝まず。講談、落語、芝居、相撲等の娛樂遊戯は、常に高き木戸錢や、場代を意とせざる、多數の



聴衆 看客を有するに、費なくして心靈救済の福音を聞きしむる、演説會、説教會の多くは、微々として振はず、教界知名の士の聲望、其聴衆を惹くの點に於て、一個の藝人に及ばざるの觀あるは、萬事、物質的、肉體的なる現代人心の趨向を示せるに非ずや。

思はざる  
死來らる

キリスト教は、必しも娛樂を否認するものにあらず。然れど、何事よりも、何物よりも、先づ第一に神の國と其義を求めよと謂ふなり。人生の無常なるは、何人も朝夕實見する所なり。死の手は、男女、老幼、貧富、強弱の別なく、何人をも奪ひ去るなり。死は如何なる時にも來り、如何なる場所をも見舞ふなり。「死の來るは、夜盜の來るが如し。人々平和無事なりと云んとき、亡び忽ちに到らん。」然らば、何人も其健康を恃む可らず。況んや富貴權勢をや。然らば、時間なしとて、此大問題を閑却する勿れ。閑を得ば研究せんなど、言ふ勿れ。「愚なる者よ。今宵汝の靈を取らるゝとあるべし」。思ひ立つ日を吉日とせよ。時間と方

著者の忠  
言

法は優に見出さるべし。

讀者、嘗て友よりキリスト教研究の勧めを受けざりしや。或時、或場合に、求道の念を起さざりしや。今も猶頑然として、神の靈能を拒まんと欲するや。嗚呼讀者にして求道の志起らば、是實に神が其心の戸を叩き給へるなり。斷然起ちて戸を開け。吾から神の慈光を拒むの愚を學ぶ勿れ。神の切なる思召を無にして罪を重ぬる勿れ。「是故に、我等閑し所を流過ること莫らん爲に、愈篤く慎むべし。それ天使等に託りて告給ひし言堅立して、凡ての違逆と、不順と、皆正しき報を受たらんには、斯の如き大なる救を、我等閑にして、何で追るゝことを得んや。」(希伯來二〇一三)一たび内心に、研究せよ、求道せよとの微かなる囁きを聞かば、決して之を閑却し抹殺する勿れ。堅く決心の臍を固め、萬障を排して、是が實行に着手すべし。目的を達する迄は挫折する勿れ。「求めよ、然らば與へられ、尋ねよ、然らば遇ひ、門を叩けよ、然らば開かるゝことを得ん。蓋すべて求む



る者は得、尋ねる者はあひ、門を叩く者は開かる可ければなり。汝等の中、誰か其子パンを求めんに、石を與へんや。また魚を求めんに、蛇を與へんや。然ば汝等惡しき者ながら、善賜を其子に與ふを知。まして天に在す汝等の父は、求むる者に善賜を與へざらんや。」(馬太七〇七—一〇七)。是神の約束にして、無數の信者の違はざる實驗なり。我讀者よ、願くは躊躇逡巡して、神意を空うし、吾から天與の慶福に洩れて、亡滅の道に彷徨する勿れ。信する者は永遠の生命を得、信せざる者は罪に定めらる。信するや否やは、死生禍福の分る、處なり。必しも死生禍福と云はんや。眞の人として、其本分を完し得るや否やも、繫つて此に在り。願くは神靈の啓導、讀者の上に在りて、此救に與からせ給はんことを。ア—メン。

### 基督教の特色終

### 附錄 求道の葉

「心の清き者は幸なり。其人は神を見ることを得べければなり。」(馬太五〇八)

(一) 求道の動機 求道の動機は、飽迄も純潔眞摯ならざる可らず。研究の態度は、何處迄も公平謙遜にして、而も熱心ならざる可らず。道樂半分、冷かし半分と云ふ如き、輕薄なる心にては、眞理を曉り、神の救ひに與かること難し。自家の頭上に關はる、最大問題の解決を得んことの、誠實なる志望なかる可らず。

(二) 研究の第一方法 研究の方法は、教會に出席し、牧師、傳道師に就き、信者に交り、此等先輩の指導を受くると同時に、可成、宗教的空氣を呼吸することなり。今や、我邦殆んど到る處に、基督教會、若くは講義所の存在せざるはなく、牧師又は傳道師の定住せざる處は稀なり。斯る地方に住する者、又は斯る地方と交通の便ある地に住む人は、先づ勉めて、教會の禮拜説教や、演説講演等の



諸集會に出席し、同時に、牧師、傳道師に求道の志を告げ、其指導を乞ひ、聖書の研究を勵み、又はキリスト教に關する書籍を繙き、キリスト教的偉人の傳記に親む等、孜孜として怠らずんば、終には疑團氷解して、神の救ひに與かるに至るべし。此は智的要求を満足せしめて後、信せんと欲する人々に取り、必要の手續なり。然れど、救済の靈能は、必しも智的方面を通じて働くものにあらず。最も情意の方面に働くことあり。智識の方面より入る者も可なり、情意の方面より救はるゝことも又大に可なり。多年道を聞て猶信せざる者あり。一席の説教に感じて悔改むる者あり。是れ實に其人の境遇、經歷、性格に應じて、之を指導する神の愛の攝理と謂はざる可らず。

(三) 教會に參列し、牧師傳道師に接する便宜を有せざる者は、如何すべきや。今や、交通の便大に開け、千里比隣の思あらしむるとき、假令我住所に教會なく、傳道師牧師なくとも、志だにあらば、數里の道、歩して達すべく、十里、二十里

汽車一瞬にして到るを得べし。地方に於て、東京名優連の演劇、又は大相撲等の興行あるや、近きは數里、遠きは十里の外より、來り見るもの多し。一日半宵の娛樂を得ん爲に、人能く之を爲す。而かも永遠の生命を得て、多幸有益なる生活を送るや否やを決する、一生懸命の大事の爲に、斯くなすことを難んずるや。肉體の病を癒す爲に、名醫若くは良病院に治を乞ふ者は、道の遠近を意とせず。其病症により、其人の境遇によりては、遠隔の病院に、數週、數月、或は數年の永き、入院治療を受けることすらあるにあらずや。而かも心靈の疾病を醫する爲に、此種の手數と費用とを吝まざる者ありや。吾人は先づ此心靈救済は、肉體の治癒と同等なる、否其以上の注意を拂ふべき、緊急切要の大問題たることを警告せんと欲す。されば

(四) 研究の第二方法 研究の第二の手段は自家研究なり。其人の境遇事情、如何にするも、前記普通の方法を取る能はざる人ありとせば、自修獨學、必しも



眞理に達し難きにあらず。重罪を犯し、多年獄裏にありて、不思議の機縁より、求道の志を起し、聖書を精讀し、讀書百遍義自ら通すとの言に違はず、言はざる聖書に神の言を聞き、紙背に躍動する靈活のキリストを見、身は猶鐵鎖に繋るれども、心は既に救はれて自由となり、幽暗の獄裏、尙天父とキリストの光明を仰ぎ、出獄の後、翻然更生の事實を示して、世人の視聽を驚かし、靈能の證明を爲したる者、古今内外に其例尠からず。然れば、志のある處、必ず途あり。聖書の精讀、第一なり。其解釋、若くはキリスト教に關する善良なる書籍、新聞、雜誌類の精讀、其二なり。今や是等の書籍、新聞、雜誌にして、能く求道者の伴侶たり、師友たることを期するもの尠からず。質疑も適ふべし、教界先輩の士の、有益なる説教演説にも接し得べく、篤信敬虔なる信者の實驗をも聞くを得べし。自然界の萬物を觀察考究して、神の智能と愛とを發見すること、其三なり。科學者は望遠鏡により、顯微鏡により、神の智能の絶大なるを驚歎し、詩人は花に、

月に、神の榮光と善美を認めて、讚美するなり。靜かに見來れば、何物も神に關して、何ものかを吾人に告げざるはなし。神とキリストとに關して、未だ得る所なくも、天地を動かす底の至誠を以て、神靈の啓導を仰ぐこと、其四なり。(以上第三、第四は、第一の研究方法によりて研究する人にも、均しく必要なり。)然れば、キリストを知り、其救に與るには、教會以外、其途なきにあらずと雖も、多少救済の靈能を實驗し、體得せる牧師、信者の生ける人格に接し、幾分か俗塵を脱せる、宗教的空氣を呼吸し得るの點に於て、能ふ丈け第一方法を取るの可なるを見るなり。

(五) 研究途上の障礙 教會に出入し、聖書を精讀し、救の途を辿り初むるや、途上の障礙は、忽にして彼の前進を阻げんとす。第一に、聖書中にあるキリストの奇跡的誕生を始め、其行ひ給ひしあらゆる奇跡異能を見て礙くなり。彼は是を以て妄誕不稽となし、全體を推し、遂に之を放棄するなり。第二に、キリストの



言説の意味を正解するを得ずして、其片言隻句を捉へ、或は非國家的なり、没人情なりと斷じ、キリスト教は、我邦忠孝の教と兩立せずなど、誣ひ、自ら礙き、亦人を礙かすに至る。第三に、キリストの要求の餘りに嚴正にして、高尚遠大なるに驚き、是は到底人間の能くする所にあらずとて、辟易して去るなり。第四は教會の内容、牧師、信者の人格、言行を見て礙くなり。彼等は牧師、信者を以て、所謂清淨潔白の君子、無罪完全の神の子と信じ、教會を以て、斯る人の集まれる天國なりと思ひ居るに、事實は往々にして之に反し、牧師、傳道者にして、存外人格低き人あり。信者にして、心事の陋劣なる人あり。随つて教會内に争ひあり、嫉みあり、朋黨あり、反目あり。美しき徳風四隣を薰化すべき牧師、信者、若くは教會の中に、一種の嫌惡すべき缺點あるを觀て、直にキリスト教其物なりと速斷し、凡ての教會、凡ての信者、悉く如此ものなりと推定し、彼等は欺かれたる如き感を抱いて去るなり。

由來、麥の中に稗子交り、眞善美の中に偽物の混するは、靈界の恨事なり。然れば、能く其眞偽を判ち、菽麥を辨するの明と忍耐となかるべからず。キリスト教は、畢竟する處、キリスト彼自身なり。彼を信じて救はれ、彼に繋がれて果を結ぶ所の、動かす可らざる實驗なり。事實なり。而かも此實驗と事實とは、一朝一夕にして完成せらるゝにあらず。救濟の實驗には、努力あり、進歩あり。神の國の實現、亦次第、順序あり。基督信者とは、一たび救濟の恵に與りたる以上、復何等の努力奮闘を要せず、隨て進歩發展なきもの、謂にあらず。救濟の靈能は、永遠に我等を助け勵し、我等をしてキリストを望んで、永遠に進歩向上せしむるものなり。故に牧師、信者の靈的狀態は、其信仰の量に従ひて高低あり。其救の實驗に深淺あり。隨て其人格、言行、事業に現るゝや、自づから上下優劣の差等あるは免れざる所なり。然らば、求道者にして、不幸にして如何はしき教會と、牧師、信者に礙んとする場合に臨まば、キリスト教會を見ずして、キリストの教



を見るべし。未成品たる劣等の人々を見ずして、古今内外其實例に乏しからざる幾多の進歩發達せる優良なる人々を見るべし。否寧ろ常にキリスト自身を仰ぐべし。而して他人は兎に角、自己は眞個キリストの徒たり、神の子たるに適ふ者とならんことを期し、上記の障礙の如きは、更に深き研究と忍耐を以て、之を排除するに勉め、或は暫時之を意に介せずして、最終の目的に向つて猛進すべし。而して、一度眞理の光明に照され、救済の實驗に參すれば、是等の障礙は自ら除去せられ、嘗て唾棄せん計りに思ひし教會や、牧師信者の暗黒面も、次第に變じ來り、捨て難き光明の一面を認め、吾獨り潔く高きが如く思ふ傲慢は、我亦一の未成品なりしとの謙遜の心となり、共に相携へ、相助けて、向上の一路に進んどの意氣と愛とに勵まざるゝに至るべし。

「イエスまた海邊にて教訓を始めしに、多くの人々彼に集りければ、彼舟に乗て座し、凡ての人々は海に沿ふて岸に立り。彼譬を以て多くの事を彼等に教ふ。

教へて曰けるは、聽よ、種播もの播んとて出づ、播けるとき、或種は路の傍に遺しが、空の鳥來りて之を食へり。或種は土うすき磽地に遺しが、土深からねば、直に萌出たれど、日出しかば曝れ、根なきが故に枯たり。或種は棘の中に遺しが、棘そだちて之を蔽ければ、實を結ばざりき。また或種は沃壤に遺しが、其苗はえいで、蕃り、實を結ぶこと、或は三十倍或は六十倍、或は百倍せり。また彼等に曰けるは、耳ありて聽ゆる者は聽くべし。衆人の居らざりしとき、イエスの側に在りし者と、十二弟子と、此譬を問しかば、イエス彼等に曰けるは、神の國の奧義を汝等には知ことを給へど、他の者には凡て譬を以てす。是彼等視る時、視ても見ず。聽とき、聽ても聽らず。心を改めて其罪の赦しを得ざらん爲なり。また彼等に曰けるは、汝等此譬を知らざるか。然ば如何にして凡ての譬を識ことを得んや。それ播者は教を播なり。道の播れて路の傍に遺しものは、人道を聽しとき、直にサタン來りて、其心に播れたる道を奪取なり。



また礎地に播れたるものは、人道を聴き、直ちに喜びて之を受、然れど己に根なきが故、唯暫時のみ、後道の爲に、患難、或は迫害に遇ときは、忽ち礙く者なり。又棘の中に播れたるものは、人道を聴き、此世の思慮と貨財の惑ひまた各々の情慾入來りて、道を蔽ぐにより、終に實を結ばざる者なり。沃壤に播れたる者は、人道を聴て之を受、或は三十倍、或は六十倍、或は百倍の實を結ぶ者なり。(馬可四〇一—二一)

「我は眞の葡萄樹、我父は農夫なり。我に在りて、凡て實を結ばざる枝は、父之を剪除、すべて實を結ぶ枝は、之を潔む。蓋ますく繁く實を結ばしめん爲なり。今汝等、我が曰し言によりて潔くなれり。汝等我に居、さらば我亦汝等に居ん。枝もし葡萄樹に連らざれば、自ら實を結ぶこと能はず。汝等若し我に連らざれば、亦斯の如くならん。我は葡萄樹、なんぢらは其枝なり。人若し我に居、我亦彼に居ば、多くの實を結ぶべし。蓋若し汝等我を離る、時は、何事を

も行能さればなり。人若し我に居らざれば、離れたる枝の如く、外に棄られて枯るなり。人之を集め、火に投入て焚べし。汝等もし我に居り、また我言し言なんぢらに居ば、凡て欲ふ所求に従ひて與へらるべし。汝等多くの實を結ば、我父之に由て榮を受、然ば汝等我弟子なり。」(約翰傳十五〇—一八)

福音の種は、既に諸君の心田に播れたり。之をして實を結ばしむると否とは、諸君の決心如何にあり。以上摘録したる聖語は、能く此間の消息を語るなり。此種の諸君の心中に育ちて、實を結び、神の榮光を顯し、其聖旨に答へ、其愛に酬い、自ら神子的生活を完うし、進んで各自與へられたる範圍と力量とに應じ、天國實現の爲に努力するに至らんことは、天父とキリストの切に望み給ふ所にして、又其救ひに與かり、聊か此靈的實驗を味ふことを得たる著者の滿腔の祈願なり。アメン。



大正元年十二月四日印刷  
大正元年十二月七日發行



基督教の特色

定價金三十錢

著者 福岡縣久留米市櫛原町四丁目廿番地 故岩 谷 定 次 郎

發行者 橫濱市壽町一丁目三十九番地 牟 田 易 太 郎

印刷者 橫濱市太田町五丁目八十七番地 村 岡 平 吉

印刷所 橫濱市山下町八十一番地 福音印刷合資會社

橫濱市壽町一丁目三十九番地

發行所

福音書店



272  
240



終

